

令和元年度「北海道大学総長表彰」表彰式を挙行

北海道大学一般入試(前期日程・後期日程)及び私費外国人留学生入試の実施・
一般入試(後期日程)の試験中止と合格者の発表

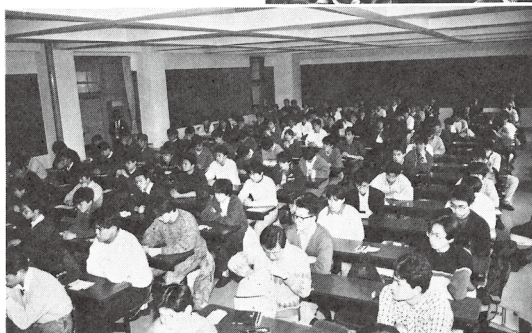
北大時報



(試験会場に向かう受験生:正門前)



(試験会場に入る受験生:教養部前)



(試験開始を待つ受験生:教養部)

(第二次入学試験)

3

No.420—1989 (平成元年)

■ 全学ニュース

- 1 令和元年度「北海道大学総長表彰」表彰式を挙
- 2 北海道大学一般入試（前期日程）及び私費外国人留学生入試の実施・一般入試（後期日程）の試験中止と合格者の発表
- 5 札幌地方石油業協同組合と「災害時における石油類燃料の供給等に関する協定」を締結
- 6 研究者のためのスキルアップセミナー⑬「伝わる情報発信術～研究プレスリリースとビジュアルデザイン～」を開催
- 7 Academic Fantasia 12月は3名の研究者が高校生に向けた講義を実施
- 9 北大フロンティア基金
- 11 国立大学法人等情報化連絡協議会を開催
- 12 新渡戸カレッジ基礎・オーナーズプログラム大学院教育コース2019年度第2回メンターフォーラムを開催
- 13 令和元年北大ペンハロー賞授与式を挙
- 13 高等教育推進機構日本語研修コース修了式（2019年10月入学者）
- 14 産学連携推進本部産学協働マネージャーが「DEMOLAファシリテーター」に認定
- 15 「ハルトプライズ」に学ぶー世界のSDGs起業家育成プログラムを開催
- 16 令和元年度事務職員海外派遣研修受講者による報告会を開催
- 17 農学研究院に古河電気工業株式会社との産業創出講座「アグリメディカル講座」を開
- 18 「2020年北海道大学インドネシア同窓会懇談会」及び「インドネシア交流デー」を開催
- 19 Ph.Discoverキックオフイベント「博士と産業界の橋渡しのために、大学と企業に求められる役割を考える」を開催
- 21 博士人材と企業の情報交換会 第42回「赤い糸会&緑の会」を開催

■ 部局ニュース

- 22 総合化学院創設10周年記念事業を開催
- 23 北海道大学学芸員リカレント教育プログラム（学芸リカプロ）公開成果報告会「ミライ・ミュージアム・ミートアップ」及び公開イベント「動物園・水族館に学ぶ！ミュージアムの可能性」を開催



農学研究院に古河電気工業株式会社との産業創出講座「アグリメディカル講座」を開



総合化学院創設10周年記念事業を開催



研究者のためのスキルアップセミナー⑬「伝わる情報発信術～研究プレスリリースとビジュアルデザイン～」を開催



新渡戸カレッジ基礎・オーナーズプログラム大学院教育コース2019年度第2回メンターフォーラムを開催

- 24 教育学研究院が北海道教育委員会と連携協定を締結
- 25 教育学研究院が湧別町と連携協定を締結
- 25 公共政策大学院が教育課程連携協議会を実施
- 26 経済学部及び会計専門職大学院で特別講演会を開催
- 27 先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2019」を開催
- 28 歯学研究院長がウメオ大学歯学部を訪問
- 28 令和2年度薬学実務実習開始セレモニーを挙
- 29 工学系部局で転倒防止活動への取組みを実施
- 29 厳冬期避難所展開・宿泊演習2020に出席
- 30 水産科学院・水産学部主催「業界研究セミナー」を開催
- 31 国際広報メディア・観光学院がシェフィールド大学との教育・研究交流「TLLPワークショップ」を開催
- 32 「本は脳を育てる」図書展示を開催
- 32 研修出張報告会「オープンサイエンス・研究データ関係」を開催
- 33 令和元年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏・水圏ステーション技術職員専門研修を開催
- 34 北海道大学病院の医療スタッフがHBCラジオで健康情報を発信！

■ 定年を迎えるにあたって 35

■ 諸会議の開催状況 64

■ 学内規程 65

■ 表敬訪問 66

■ 人事 66

67 新任教授紹介

■ 訃報

68 名誉教授 小林 甫 氏

■全学ニュース

令和元年度「北海道大学総長表彰」表彰式を挙



教育研究総長表彰被表彰者と列席者による記念撮影



教育研究支援業務総長表彰被表彰者と列席者による記念撮影

2月17日（月）、学術交流会館において「教育研究総長表彰」「教育研究支援業務総長表彰」表彰式が執り行われ、関係者列席のもと、笠原正典総長職務代理から被表彰者に、賞状及び報奨金（目録）が授与されました。

教育研究総長表彰は、教育活動及び研究活動を通し、特に優れた功績をあげた教員を、また、教育研究支援業務総長表彰は、業務改善等の取り組みを通し優れた功績をあげた職員を顕彰することにより、本学の活性化と更なる

発展に資することを目的としたものです。

なお、このたび表彰を受けられた方々は、下記のとおりです。

（総務企画部人事課厚生労務室）

<教育研究総長表彰>

所 属	氏 名
理学研究院	澤 村 正 也
理学研究院	浜 向 直
薬学研究院	吉 野 達 彦
メディア・コミュニケーション研究院	鍋 島 孝 子
工学研究院	幅 崎 浩 樹
経済学研究院	韓 載 香
医学研究院	渥 美 達 也
医学研究院	坂 本 直 哉

所 属	氏 名
文学研究院	La Fay,Michelle Kay
情報科学研究院	宮 永 喜 一
低温科学研究所	大 島 慶一郎
遺伝子病制御研究所	高 岡 晃 教
触媒科学研究所	大 谷 文 章
北極域研究センター	安 成 哲 平
総合博物館	小 林 快 次

<教育研究支援業務総長表彰（貢献賞）>

最優秀賞

技術部門 アイソトープ総合センター 阿保 憲史

優秀賞

技術部門 低温科学研究所 藤田 和之
技術部門 低温科学研究所 斎藤 史明

医療部門 北海道大学病院 検査・輸血部／病理部病理診断科

奨励賞

事務部門 研究推進部研究支援課
事務部門 医学系事務部総務課人事担当
技術部門 獣医学研究院技術室動物施設技術班

技術部門 北方生物圏フィールド科学センター森林園ステーション北管理部
医療部門 北海道大学病院 検査・輸血部輸血検査室

北海道大学一般入試（前期日程）及び私費外国人留学生入試の実施・一般入試（後期日程）の試験中止と合格者の発表

令和2年度一般入試の個別学力検査等（前期日程）は2月25日（火）・26日（水）に、私費外国人留学生入試第2次選考は2月14日（金）に実施しました。3月12日（木）に実施予定であった個別学力検査等（後期日程）は、中止とすることを3月6日（金）に決定しました。

各試験の実施状況等は、次のとおりです。

1. 前期日程

志願者5,474名のうち、本学が指定した大学入試センター試験の受験を要する教科・科目を受験していなかった失格者4名を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行いました。その結果、志願者全員が合格し、個別学力検査等の受験対象者は5,470名で、受験者は5,308名でした。

合格者は2,002名で、合格発表は、3月7日（土）午前9時に特設サイトに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が745名で全体の37.2%。卒業年度別では、令和2年3月高等学校卒業見込み者が1,282名で全体の64.0%。また、男女別では女子が582名で全体の29.1%でした。

2. 後期日程

志願者4,278名のうち、本学が指定した大学入試センター試験の受験を要する教科・科目を受験していなかった失格者4名を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行いました。その結果、第1段階選抜に合格し個別学力検査等の受験対象となった者は4,257名でした。

個別学力検査等（後期日程）の中止に伴い、今回新たに決定した配点をもとに大学入試センター試験の成績をもって合否判定を行いました。その結果、合格者は675名で、合格発表は、3月20日（金）午前9時に特設サイトに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が112名で全体の16.6%。卒業年度別では、令和2年3月高等学校卒業見込み者が372名で全体の55.1%。また、男女別では女子が161名で全体の23.9%でした。

3. 私費外国人留学生入試

私費外国人留学生入試の志願者は165名で、第1次選考の合格者は58名、第2次選考の受験者は46名、合格者は24名でした。

（学務部入試課）

令和2年度一般入試（前期日程）合格者数等一覧

学部・学科等			募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者	
総合入試	文系		95	386 (104)	8 (1)	378 (103)	4.0	105 (31)	
	理系	数学重点選抜群	129	403 (56)	12 (3)	391 (53)	3.0	133 (17)	
		物理重点選抜群	233	659 (73)	17 (4)	642 (69)	2.8	239 (17)	
		化学重点選抜群	233	644 (147)	22 (11)	622 (136)	2.7	243 (48)	
		生物重点選抜群	175	449 (192)	14 (7)	435 (185)	2.5	179 (66)	
		総合科学選抜群	247	531 (177)	11 (2)	520 (175)	2.1	253 (78)	
	文学部		118	360 (157)	7 (1)	353 (156)	3.0	127 (60)	
教育学部		20	57 (36)	1 (1)	56 (35)	2.8	20 (12)		
法学部		140	279 (97)	2 (1)	277 (96)	2.0	143 (43)		
経済学部		140	376 (74)	10 (3)	366 (71)	2.6	146 (34)		
学部別入試	医学科	医学科	102	366 (89)	19 (5)	347 (84)	3.4	102 (25)	
		保健学科	看護学専攻	60	144 (131)	9 (8)	135 (123)	2.3	62 (57)
			放射線技術科学専攻	28	114 (42)	6 (2)	108 (40)	3.9	29 (7)
			検査技術科学専攻	28	100 (66)	1 (0)	99 (66)	3.5	28 (17)
			理学療法学専攻	13	39 (18)	2 (1)	37 (17)	2.8	14 (6)
			作業療法学専攻	13	34 (25)	3 (3)	31 (22)	2.4	14 (9)
		歯学部		32	110 (49)	11 (6)	99 (43)	3.1	32 (12)
	獣医学部		20	92 (48)	1 (0)	91 (48)	4.6	21 (9)	
	水産学部		111	327 (99)	6 (3)	321 (96)	2.9	112 (34)	
	計		1,937	5,470 (1,680)	162 (62)	5,308 (1,618)	2.7	2,002 (582)	

※ () 内の数字は女子で内数

令和2年度一般入試（後期日程）合格者数等一覧

学部・学科等			募集人員	第1段階選抜合格者	合格者	
学部別入試	文学部		37	306 (118)	57 (23)	
	教育学部		10	86 (30)	13 (3)	
	法学部		40	438 (114)	65 (12)	
	経済学部		20	256 (36)	30 (5)	
	理学部	数学科		13	98 (9)	16 (3)
		物理学科		10	107 (7)	6 (0)
		化学科		23	123 (15)	28 (3)
		生物科学科 生物学専修分野		10	61 (18)	10 (1)
		生物科学科 高分子機能学専修分野		5	53 (14)	6 (4)
		地球惑星科学科		5	66 (13)	6 (1)
	医学部	保健学科	放射線技術科学専攻	7	79 (38)	10 (6)
			検査技術科学専攻	7	87 (68)	13 (10)
			理学療法学専攻	4	28 (16)	7 (4)
	歯学部		8	133 (66)	9 (7)	
	薬学部		24	254 (98)	34 (14)	
	工学部	応用理工系学科		37	277 (20)	47 (3)
		情報エレクトロニクス学科		38	301 (24)	53 (7)
		機械知能工学科		30	234 (15)	39 (4)
		環境社会工学科		53	384 (56)	76 (12)
	農学部		53	487 (138)	64 (14)	
	獣医学部		15	90 (45)	17 (10)	
	水産学部		50	309 (81)	69 (15)	
	計			499	4,257 (1,039)	675 (161)

※ () 内の数字は女子で内数

※令和2年度一般入試（後期日程）は、個別学力検査等の中止に伴い、センター試験の成績で可否を決定した。

令和2年度私費外国人留学生入試合格者数等一覧

学部・学科等

学部・学科・専攻・コース等		志 願 者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合 格 者	
文学部	人文科学科	14	(3)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
教育学部	教育学科	4	(3)	3	(2)	2	(2)	0	(0)
法学部	法学課程	8	(3)	3	(1)	2	(1)	2	(1)
経済学部	経済学科	12	(4)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	経営学科	10	(6)	5	(3)	2	(1)	0	(0)
理学部	数学科	4	(1)	2	(0)	1	(0)	0	(0)
	物理学科	6	(1)	5	(1)	5	(1)	4	(1)
	化学科	3	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	生物科学科	8	(4)	2	(1)	2	(1)	1	(1)
	(生物学専修分野)	5	(2)	2	(1)	2	(1)	1	(1)
	(高分子機能学専修分野)	3	(2)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	地球惑星科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
医学部	医学科	1	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
	保健学科	5	(2)	3	(1)	3	(1)	2	(1)
	看護学専攻	-	-	-	-	-	-	-	-
	放射線技術科学専攻	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	検査技術科学専攻	3	(2)	2	(1)	2	(1)	2	(1)
	理学療法学専攻	1	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
	作業療法学専攻	-	-	-	-	-	-	-	-
歯学部	歯学科	2	(2)	2	(2)	2	(2)	0	(0)
薬学部	薬科学科	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	薬学科	5	(3)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
工学部	応用理工学科	11	(2)	5	(0)	4	(0)	3	(0)
	応用物理学コース	1	(0)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	応用化学コース	4	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	応用マテリアル工学コース	6	(1)	4	(0)	3	(0)	2	(0)
	情報エレクトロニクス学科	29	(6)	9	(1)	7	(1)	3	(0)
	情報理工学コース	17	(4)	2	(0)	2	(0)	1	(0)
	電気電子工学コース	6	(0)	4	(0)	3	(0)	2	(0)
	生体情報コース	1	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	メディアネットワークコース	5	(1)	3	(1)	2	(1)	0	(0)
	電気制御システムコース	-	-	-	-	-	-	-	-
	機械知能工学科	11	(2)	5	(1)	4	(0)	3	(0)
	機械情報コース	10	(2)	5	(1)	4	(0)	3	(0)
	機械システムコース	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	環境社会工学科	8	(5)	6	(4)	5	(4)	3	(3)
	社会基盤学コース	-	-	-	-	-	-	-	-
	国土政策学コース	-	-	-	-	-	-	-	-
	建築都市コース	5	(3)	3	(2)	2	(2)	2	(2)
	環境工学コース	2	(1)	2	(1)	2	(1)	0	(0)
	資源循環システムコース	1	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	生物資源科学科	4	(2)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
農学部	応用生命科学科	7	(4)	1	(1)	1	(1)	0	(0)
	生物機能化学科	2	(2)	2	(2)	1	(1)	1	(1)
	森林科学科	4	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	畜産科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	生物環境工学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	農業経済学科	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	共同獣医学課程	2	(1)	2	(1)	2	(1)	1	(1)
水産学部	海洋生物科学科	3	(2)	2	(1)	2	(1)	1	(1)
	海洋資源科学科								
	増殖生命科学科								
	資源機能化学科								
合 計		165	(59)	58	(22)	46	(18)	24	(10)

※ () 内の数字は女子で内数

国・地域別

国・地域	志 願 者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合 格 者	
中国 (香港を含む)	108	(42)	47	(20)	37	(16)	20	(9)
韓国	46	(12)	9	(2)	8	(2)	3	(1)
台湾	8	(4)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
デンマーク	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
インドネシア	1	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
マレーシア	1	(0)	1	(0)	0	(0)	0	(0)
合 計	165	(59)	58	(22)	46	(18)	24	(10)

※ () 内の数字は女子で内数

札幌地方石油業協同組合と「災害時における石油類燃料の供給等に関する協定」を締結

2月19日（水）、本学と札幌地方石油業協同組合（以下、札石協）は、「災害時における石油類燃料の供給等に関する協定」を締結しました。本学にて行われた締結式には、笠原正典総長職務代理と河辺善一札石協理事長が出席しました。

本学では、平成30年9月に発生した北海道胆振東部地震以降、災害時にお

ける自家発電機の燃料や冬季の暖房用燃料の調達方法が課題となっていました。

札石協は、石狩振興局管内の石油製品の販売を行う事業者（約140人）を組合員としています。また、札幌市を含む石狩振興局管内の自治体と協定を締結しており、北海道胆振東部地震発生の際には、同協定に基づく燃料供給

を行った実績があります。

本協定の締結により、本学附属病院や本学が独自に開設する避難所等への優先的な燃料供給が可能となり、災害対応力の強化が期待されます。

（総務企画部総務課）



締結式の様子



河辺理事長（左）と笠原総長職務代理（右）

研究者のためのスキルアップセミナー⑬ 「伝わる情報発信術～研究プレスリリースとビジュアルデザイン～」を開催



講演者・スタッフ全員で集合写真

1月27日（月）に医学部学友会館「フラテ」で、研究者のためのスキルアップセミナー⑬「伝わる情報発信術～研究プレスリリースとビジュアルデザイン～」を開催しました。山本佳世子氏（日刊工業新聞社 論説委員 兼 編集委員）、田中佐代子氏（筑波大学 芸術系 教授）を講師に迎え、当日は、101名（教員47名、職員20名、学生27名、学外者等7名）が参加しました。

講師2名の講演に先立ち、黒岩麻里総長補佐（広報室担当/理学研究院 教授）から開会の挨拶をいただきました。

その後、中屋敷洋介氏（総務企画部広報課 広報・渉外担当）から、「北海道大学のプレスリリースー本学の手続き・実績・傾向ー」と題し、本学の和文プレスリリースについて説明がありました。続いて、山本氏が、「社会とつながるためのプレスリリース入門」と題し、研究者がプレスリリースを書く際に意識すべきことを現役記者の立場から解説しました。その後、田中氏が、「外部資金獲得のためのビジュアルデザイン入門」と題し、プレゼン資料やポスター作成時のポイントや、研究費の申請書などの記載におい

て気をつけると良いポイントについて、事例を交えて講演しました。最後に、講師が会場からの様々な質問に回答し、セミナーは幕を閉じました。

参加者からは、「記者目線でリリースの書き方を習えたのは貴重な経験。早速リリースを書いてみようと思いました」、「ポスター全体のバランス、スライド作成時のグリッドの活用法など参考になりました」などの声がありました。

（総務企画部広報課）

開催概要

タイトル：研究者のためのスキルアップセミナー⑬

「伝わる情報発信術～研究プレスリリースとビジュアルデザイン～」

日時：令和2年1月27日（月）17:15～19:30

会場：北海道大学 医学部学友会館「フラテ」大ホール

主催：北海道大学大学力強化推進本部、広報室

協力：科学技術コミュニケーション教育研究部門（CoSTEP）、URAステーション



黒岩総長補佐の挨拶



中屋敷氏の講演



山本氏の講演



田中氏の講演

Academic Fantasia 12月は3名の研究者が高校生に向けた講義を実施

平成24年度から実施している「国民との科学・技術対話」推進に関する研究支援事業、通称「Academic Fantasia（アカデミックファンタジスタ）」では、北海道新聞社の協力のもと、高校生を対象とした講義を行っています。12月は3名の研究者が講義を実施しました。

講義レポートは、facebookに掲載していますのでぜひご覧ください。

@Hokkaido.taiwa

◆<https://www.facebook.com/Hokkaido.univ.taiwa/>

（総務企画部広報課）

「絶対零度の世界」

■日 時：令和元年12月3日（火）14:00-15:30

■会 場：北海道旭川東高等学校

■参加生徒：1年生 75名

■参加教員：網塚 浩（理学研究院 教授）

網塚教授は、11月に実施した北海道札幌北高等学校での講義に続き、北海道旭川東高等学校にて2度目の講義を行いました。デモ実験を通して物理の現象と理論を伝えました。



多くの高校生が参加しました



質問する高校生と網塚教授

「動物と話をする人々」

■日 時：令和元年12月10日（火）16:00-17:30

■会 場：北海道札幌北高等学校

■参加生徒：1, 2年生 15名

■参加教員：山口未花子（文学研究院 准教授）

山口准教授は、カナダの先住民カスカの人々と動物との関わり方について、狩猟や信仰などに焦点を当てて調査しています。狩猟採集民である彼らのライフスタイルや、動物と話をする「メディシン」と呼ばれる人々との交流から学んだことを語りました。



カナダオオヤマネコの毛皮を見せる山口准教授



毛皮に触れる高校生

「先住民研究としてのアイヌ民族史」

- 日 時：令和元年12月11日（水）16:40-18:10
- 会 場：北海高等学校
- 参加生徒：1年生 20名
- 参加教員：加藤博文（アイヌ・先住民研究センター 教授）

加藤教授は、2011年から毎年夏に礼文島「浜中2遺跡」で発掘調査をしています。浜中2遺跡は、縄文文化晩期から近世アイヌ文化期まで、約4,000年間にわたる人々の暮らしが連続的に観察できる貴重な遺跡です。高校生たちは遺跡から出土したものを手に取りながら講義を聞きました。



アイヌ文化について語る加藤教授



出土物を手にする高校生

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を發揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報
基金累計額（2月29日現在）

25,862件 5,021,576,111円

2月のご寄附状況

法人等5社、個人147名の方々から6,413,574円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、銘板の掲示、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

株式会社道新文化センター、富井建設株式会社、中村クリニック、北海道ガス株式会社

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	荒井 修	安保 昌俊	石井 哲夫	井原 博	今村 康弘	入澤 秀次	岩崎 克巳
岩原 義人	上野 勝利	上野 貴希	縁記 和也	大石 春雄	大釜 淳	大原 正範	大矢 能成
岡本 博之	奥田 英信	小田原一史	小内 透	小柳 毅	甲斐 陽輔	金川 眞行	河野 好治
河本 充司	菅野 彰一	木全 重之	工藤 俊哉	斉藤 久	境 政人	榊 信昭	坂本 大介
櫻井 公一	桜間 雄蔵	薩川 和春	佐藤 徹	佐藤 文保	佐藤 雅彦	佐藤 八雷	三升畑元基
志済 聡子	芝木 晃彦	嶋田 誠	志村 幹夫	白鳥 里佳	白鳥 貴久	杉江 和男	鈴木 貴之
鈴木 博史	清野 康生	関口 新造	関崎 勉	瀬名波栄潤	高橋 彩	高林 秀樹	竹内 義治
竹田 誠	建脇 勉	田中 和裕	田畑 太	辻野 一三	土家 琢磨	土屋 裕	角井 淳一
寺澤 睦	戸田 純子	豊田 威信	中塚 英俊	永原 拓巳	中村 晃忠	中村 克宏	中村 知道
永森 聡	長屋 良行	成ヶ澤憲太郎	名和 豊春	西田 実弘	橋本 和之	橋本 学	東 香苗
福地 光男	福永 悟郎	藤井 基陽	藤澤 裕子	堀岡 咲枝	前田 博	牧内 勝哉	政氏 伸夫
松下 和彦	松田 健一	松原 謙一	水嶋 祐治	三田村好矩	皆川 一志	宮田 信幸	村上 幸夫
余湖 兼右	横井 成尚	横山 考	吉田 勝俊	吉田 広志	吉田 裕子	米田 功	

銘板の掲示（20万円以上のご寄附）

（法人）

株式会社道新文化センター、富井建設株式会社

（個人）

荒井 修、清野 康生、福地 光男、牧内 勝哉、政氏 伸夫、吉田 勝俊

感謝状の贈呈



一般財団法人協済会 様（令和2年2月26日）

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員の方によるご寄附について」にアクセスして下さい。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff.html>

①給与からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（兼・給与口座からの引落依頼書）」をダウンロードし、ご記入の上、基金事務室に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、基金事務室にご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、基金事務室にもご用意していますので、基金事務室にお越しただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

（<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>）の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室（事務局・学内電話 2017）
--

（総務企画部広報課）

国立大学法人等情報化連絡協議会を開催

2月7日（金）、情報基盤センター北館において、令和元年度第2回国立大学法人等情報化連絡協議会を開催しました。

同協議会は、全国の国立大学法人、大学共同利用機関法人及び独立行政法人の連携・協力により、各機関が事務の情報化を推進するために設けられているもので、全国を8地区に分け、各地区の持ち回りで、全国協議会を開催しています。今年度は北海道地区が当番となっており、第2回協議会は北見工業大学を開催校として、昨年5月の第1回協議会に続いて札幌で行いました。

今回の協議会では、今後国立大学法人同士の統合によって発足する国立大学法人機構の同協議会における位置付け及び次年度の会長等の選出について

の協議、並びに今年度開催された国立大学法人等情報化発表会及び情報化要員研修についての報告がありました。

次に、オブザーバーとして出席いただいた文部科学省大臣官房政策課サイバーセキュリティ・情報化推進室の西城泰裕室長補佐から、令和元年度及び令和2年度の国立大学等に関するサイバーセキュリティ関連施策について説

明がありました。

続いて、構成校から各大学の事務情報化の状況について報告が行われ、その後の質疑応答においても情報共有・意見交換が活発に行われるなど、大変有意義な会議となりました。

（総務企画部情報企画課）



説明する文部科学省 西城室長補佐



協議会の様子

新渡戸カレッジ基礎・オナースプログラム大学院教育コース 2019年度第2回メンターフォーラムを開催



大学院メンターと新渡戸カレッジ生

2月1日（土）、フロンティア応用科学研究棟にて、2019年度第2回メンターフォーラムを開催しました。

新渡戸カレッジの大学院教育コースでは、社会の多様な分野で活躍する方々にメンターに就任いただき、新渡戸カレッジ生のキャリア意識の醸成、社会的視野の広がり、及び人的ネットワークの形成にご協力いただいています。メンターフォーラムは、新渡戸カレッジ生の大学院修了後のキャリアを念頭に、カレッジ生自身にとって身近なロールモデルであるメンターとの交流を通じて、キャリアパスをより具体的に考える機会として、年2回開催しています。

当日は、第1部として講演会を行い、『キャリアパスとキャリアチェンジから得たこと』のテーマで、3名のメンター及び3名のゲストスピーカーに、ご自身のキャリアや実社会における経験に基づくアドバイス等について英語でご講演いただきました。新渡戸カレッジ生は、多様な分野でグローバルに活躍する先輩の話に刺激を受け、熱心に耳を傾けていました。

続く第2部では、新渡戸カレッジ生が各メンター等に自由に質問し対話を行う交流会を実施しました。新渡戸カレッジ生は大学における研究活動及び今後本格化する就職活動等について積極的に質問し、アドバイスを得ること

ができました。

本メンターフォーラムを通して、新渡戸カレッジ生は、大学院生活においてどのような姿勢で学修・研究に取り組み、将来のキャリアデザインに繋げていくことができるか等について、貴重な洞察を得ることができたようです。

2019年度第2回メンターフォーラムは、3名のメンターを含む6名の方々のご協力を得て実施しました。ご協力いただきました皆様に改めて御礼申し上げます。

（学務部教育推進課）



講演の様子（左：三嶋 渉メンター、右：オフォースチュム・エリックメンター）



交流会における対話の様子（左：シェーン・ピーター先生、右：タナカ・ジェイ・マツオ先生）

令和元年北大ペンハロー賞授与式を挙行



授与式での記念写真

2月18日（火）、高等教育推進機構S講義棟において、令和元年北大ペンハロー賞の授与式を行い、長谷川晃理事・副学長から受賞学生・団体に賞状の授与と記念品の贈呈を行いました。

北大ペンハロー賞は、平成17年度か

ら開始され、本学学生の課外活動の充実と更なる活性化を図るため、1月～12月までを対象期間とし、都道府県規模の競技会・コンクールで優勝するなど、高い評価を受けた学生団体等を表彰する制度です。



3月2日（月）に函館キャンパスでも授与式を実施しました

今回は、8団体、28個人が受賞しました。これまでに167団体、484個人の計651件に授与されています。

（学務部学生支援課）

高等教育推進機構日本語研修コース修了式(2019年10月入学者)

高等教育推進機構日本語研修コース研修生の修了式を2月14日（金）に学生交流ステーションで実施しました。

この研修コースは、大使館推薦等の国費外国人留学生、本学工学部に進学する日韓共同理工系学部留学生、現代日本学プログラム留学生、及び学内公募により履修が認められた留学生に日本語予備教育を行うため、6ヶ月間開設されたものです。

今回修了式を迎えたのは、国費外国人留学生4名と日韓共同理工系学部留学生7名、現代日本学プログラム留学

生20名に加え、学内公募により履修を認められた集中日本語コース3名の計34名です。

修了式では、教職員や指導教員が見守る中、長谷川晃高等教育推進機構長から留学生一人ひとりに修了証書、履修証明書及び証明書が授与されました。続けて日本語で今後の飛躍を祈念する激励の言葉が述べられ、留学生は真剣な面持ちで聞き入っていました。

最後に記念写真を撮影し、修了式は終了しましたが、その後もしばらく、お世話になった日本語教員や留学生同

士で写真撮影や懇談が続いていました。

（学務部国際交流課）



証書を受け取る学生



集合写真（国費外国人留学生、日韓共同理工系学部留学生、集中日本語コース留学生）



集合写真（現代日本学プログラム留学生）

産学連携推進本部産学協働マネージャーが「DEMOLAファシリテーター」に認定

産学・地域協働推進機構産学連携推進本部では、文部科学省「次世代アントレプレナー育成事業（EDGE-NEXT）」を通じて起業家育成を推進し、事業実施の中でフィンランド発祥の企業課題解決プログラム「DEMOLA」を日本で初めて導入しています。「DEMOLA」とは、企業が抱える課題に対して学生と企業担当者がチームを組み、その解決策を約2カ月かけて練り上げていく、フィンランド発祥の企業課題解決プログラムです。

プログラム実施にあたっては、DEMOLA Global 社でのトレーニングを修了した「DEMOLAファシリテーター」がチームを支える中心的な存在として、活動を行う必要があります。

杉村逸郎（すぎむらいつろう）学術主任専門職が2018年3月に、平岡里菜（ひらおかりな）特定専門職員が2020年2月にファシリテーターとして認定されており、日本で認定されている3名のファシリテーターのうち、2名が本学の職員となりました。

ファシリテーターの尽力の結果、今年度は8件の課題に対して、7件のアイデアが課題提供企業に採用されました。

ファシリテーターの増員により、今後、新しいビジネスのコンセプトアイデアをさらに生み出し、地域経済を活性化させ、社会に貢献することが期待されます。

（研究推進部産学連携課）



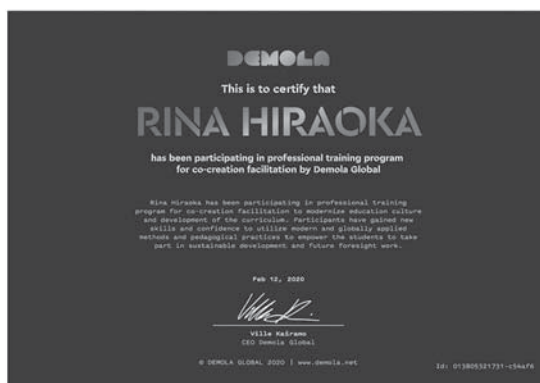
杉村学術主任専門職



トレーニング修了証（杉村学術主任専門職）



平岡特定専門職員



トレーニング修了証（平岡特定専門職員）

「ハルトプライズ」に学ぶ世界のSDGs起業家育成プログラムを開催

1月28日（火）に、フード&メディカルイノベーション国際拠点多目的ホールにおいて、「ハルトプライズ」に学ぶ世界のSDGs起業家育成プログラムを開催しました。

本イベントは、ハルトプライズ東京地区大会で日本初優勝を果たしたチームAquamou（アクアモウ）の経験談やアントレプレナー教育関係者によるパネルディスカッションなどを通じて、アントレプレナー育成支援のあり方を考えていただくことを目的としたものです。当日は、学生、教職員、行政関係者など、約30名が参加しました。

まず始めに、人材育成本部の飯田良親客員教授から、本イベントの趣旨説明を行った後、Aquamouから、ロン

ドンブートキャンプの参加報告がありました。参加者からはたくさんの質問があり、活発な意見交換が行われました。

続けて、理学研究院広報企画推進室の天津珠子准教授から、「支援のあり方について」と題し、クラウドファンディングにおける広報活動のポイントを中心に講演いただきました。

さらに、飯田客員教授、Aquamou、ハルトプライズ運営委員長Sangeetha Ratnayake氏、産学・地域協働推進機構の土屋 努客員教授によるパネルディスカッションが行われました。

最後に、ハルトプライズ運営委員長Ratnayake氏から、2020年の計画について説明がありました。

本イベントの開催前には、Aquamou

が株式会社CCCメディアハウスによる取材を受けました。この模様は、内閣府が発行する国際広報誌「We are Tomodachi」の中で、日本と世界の架け橋として活動している世界の方を紹介する「Friends of Japan」のコーナーにて掲載される予定です。ぜひご覧ください（3月発行予定）。

「We are Tomodachi」URL

<https://www.japan.go.jp/tomodachi/index.html>

今後もハルトプライズに関する様々なイベントを開催予定ですので、興味のある方は奮ってご参加ください。

（研究推進部産学連携課）



飯田客員教授から趣旨説明



チームAquamouによるブートキャンプ参加報告



天津准教授の講演



パネルディスカッションの様子



ハルトプライズ運営委員長Ratnayake氏

令和元年度事務職員海外派遣研修受講者による報告会を開催



集合写真



国際連携機構 川野辺創副機構長からの挨拶

2月7日（金）、学術交流会館において、「令和元年度事務職員海外派遣研修受講者による報告会」を開催しました。

今回は、「令和元年度北海道大学事務職員海外短期集中研修」及び「令和元年度北海道大学事務職員海外語学研修」を受講した計4名の事務職員が、スライドによる写真等を交え、研修内容、海外における生活、研修成果等を

報告しました。会場には、受講者の所属部署の職員や将来受講を考えている事務職員など、約20人の職員等が集まり、熱心に耳を傾けました。

受講者からは、海外の大学の国際化への取り組みを学んだことや、異文化交流を通じて国際的な視野を広げられたこと、英語によるコミュニケーション能力を高められたことなど、現地において実際に経験してみなければ得ら

れない多くの貴重な体験が生き生きと語られました。本研修の受講者には、本学の国際化推進に資するため、学んだことを今後の業務に役立てていくことが期待されます。

来年度以降も同様の研修が実施される予定ですので、事務職員の方の積極的な受講をお待ちしています。

（国際部国際企画課）



受講者の報告の様子

農学研究院に古河電気工業株式会社との産業創出講座 「アグリメディカル講座」を開設



黒田取締役兼執行役員常務（左）と西井理事（右）

産業創出講座は、本学と民間等外部の機関が共通の課題について一定期間継続的な共同研究を実施することにより、社会的に高い付加価値を持つ産業を創出し、社会イノベーションを推進することを目的とする制度です。

この度、農学研究院に古河電気工業株式会社との産業創出講座である「アグリメディカル講座」を開設し、令和2年4月1日から共同研究を実施します。

それに向けて連携体制を構築すべく、2月10日（月）、本学において調

印式を執り行い、本講座設置の合意書を取り交わしました。本学からは西井準治理事・副学長、西邑隆徳研究院長、寺内伊久郎産学・地域協働推進機構産学連携推進本部長ら7名が、古河電気工業株式会社からは黒田 修取締役兼執行役員常務ら7名が出席しました。

古河電気工業株式会社は、安心、安全、快適な生活を実現するため、情報、エネルギー、モビリティの社会基盤技術を中心とした事業を展開しており、今後はさらに社会課題の解決に向

けた製品開発に取り組んでいきます。本取り組みに関連して、3年前より本学が掲げるフードバレー構想のもと、北海道大学ロバスト農林水産工学科学技術先導研究会プロジェクトに同社は参加しており、研究成果を社会に還元する仕組みづくりのために、産業創出講座の開設について協議を進めてきました。

今回開設する本講座では、古河電気工業株式会社が長年にわたり培ってきたメタル・ポリマーの独自の素材力やフォトリソ・高周波で培った微細表面加工技術と安定的な生産、解析基盤技術を本学が精力的に研究を進めている農学・獣医学・医学分野の融合技術と組み合わせることで、新規産業創出を目指したイノベーションを加速させます。さらに、本講座を通じて分野を超えて柔軟に技術を扱える人材の育成を目指します。本講座の成果として、社会課題の解決に寄与できる新たな基盤技術の創出・イノベーション人材の育成が期待されます。

（農学研究院）

「2020年北海道大学インドネシア同窓会懇談会」及び「インドネシア交流デー」を開催



集合写真

2月21日（金）、22日（土）に、インドネシア共和国ボルネオ島南カリマンタン州のランブン・マンクラート大学で、「2020年北海道大学インドネシア同窓会懇談会」及び「インドネシア交流デー」を開催しました。インドネシアで同様の行事が開催されるのは昨年のパランカラヤに続いて2回目です。在インドネシアの北海道大学同窓生50名と、ランブン・マンクラート大学教職員・学生が約100名、また、在スラバヤ日本国総領事館の谷 昌紀総領事が出席しました。谷総領事は初日の開会式から、同日、南カリマンタン州知事公邸で開催された夕食会迄参加され、その模様は総領事館のSNSで発信されました。

開会式の後、本学学務部の奴賀 修国際交流課長より「Hokkaidoサマー

インスティテュート」の紹介説明が、本学水産科学院出身で環境コンサルタントとして活躍するキャサリン・ウィナタ氏、NPO法人アジアの仲間による航空フォーラムの伊佐田剛理事、広島大学卒業生で現在ランブン・マンクラート大学に所属するアビップ・アムルラ研究員から、日本やボルネオ島の持続可能ツーリズムについての講演が行われました。

22日（土）には、ランブン・マンクラート大学農学部が関わり、キノコの品種改良及び栽培を行うベンチャー企業の視察を行いました。現地の高温に耐えられるよう改良できたキノコ17種の内、最も売上を見込める1種を主に出荷し、1日で現地の1ヶ月分の最低賃金を創出することに成功しています。21日（金）の会場においても、主

婦層に雇用機会を与えられる靴製作事業が紹介されるなど、同窓生の社会貢献活動が際立っていました。

次回2021年の開催は、スマトラ島のパレンバン市にあるスリウィジャヤ大学を会場とすることで合意されました。

（農学研究院・国際連携機構）



キノコの家



在インドネシア同窓生集合写真

Ph.Discoverキックオフイベント「博士と産業界の橋渡しのために、大学と企業に求められる役割を考える」を開催

2月16日（日）、札幌都心部にあるコミュニティスペース「CONTACT」にて、「Ph.Discover」キックオフイベントを開催しました。また、これに先立ち、高度な専門性を社会人として生かせる博士人材の可能性をDiscoverしていくために、多様なステークホルダーとの意見交換、国内外の大学・企業における実践的取組みを支え、広く社会に情報発信するウェブマガジン「Ph.Discover」（<https://phdiscover.jp/phd/>）を2日前の2月14日（金）にオープンさせました。



会場の様子

11名の多様なスピーカーがテーブルを囲み、議論を交わす「円卓会議」

当日は休日で雪による悪天候の中、市民の皆様、現役大学院生、教職員など全国から約50名が集まりました。イベントはいわゆるシンポジウムやパネルディスカッションといった形式ではなく、多様な11名のスピーカーが一つのテーブルを囲み、議論を交わす「円卓会議」の形で行いました。オーディエンスは、その円卓会議を見守りながらSNSを通じて、ハッシュタグ#ph_discover_kickoffを付けた意見や質問、感想を投稿し、それに対してスピーカーが話を発展させていく場面もありました。



11名のスピーカーが一つのテーブルを囲みました

スピーカー（敬称略）は、次の11名です。

- ・丸 幸弘（株式会社リバネス代表取締役グループCEO）
- ・人見尊志（日本オラクル株式会社ソリューションエンジニアリング本部長）
- ・倉 千晴（株式会社神戸製鋼所）
- ・高橋 陸（NTT物性科学基礎研究所）
- ・伊勢田一也（旭化成株式会社人事部）
- ・吉原拓也（北海道大学人材育成本部特任教授）
- ・中垣俊之（北海道大学教授/電子科学研究所所長）
- ・正宗 淳（北海道大学大学院理学研究院教授）
- ・加藤真樹（北海道大学主任URA）
- ・大津珠子（北海道大学大学院理学研究院准教授）
- ・石森浩一郎（北海道大学大学院理学研究院教授/Ph.Discoverプロジェクト代表）

専門性を兼ね備えた多様な人材が活躍することで、よりよい社会の実現を目指す

Ph.Discoverプロジェクト代表を務める石森教授より冒頭に今回のイベントの趣旨となる博士人材の課題が次のように示されました。

石森：博士課程へ進学を希望する日本の学生は年々減っています。全国の大学で2003年には12,000人いた博士課程進学者が、現在はその半数の6,000人に減っています。一方で、博士の学位取得者のように高い専門性を持った人材を採用する企業は年々増えていますし、大学としても博士課程在学期間の金銭的・精神的なサポートをする体制が整いつつあります。このように社会は変化しているにも関わらず、「ポストク問題」「高学歴ワーキングプア」といったキーワードがメディアを經由して注目され、好転の事実があまり知られていません。このプロジェクト

は、日本にとどまることなく全世界に向けて、多様で生涯にわたって学び続けられる環境、多様なキャリアパスの重ね方を示し、専門性を兼ね備えた多彩な人材が活躍することで、よりよい社会の実現を目指そうとスタートさせました。



石森理学研究院教授
（Ph.Discoverプロジェクト代表）



左から2人目：モデレーターを務めた丸氏
（株式会社リバネス代表取締役グループCEO）

3D思考、さらに時間軸を加えた4D思考の重要性

モデレーターを務めた株式会社リバネス代表取締役グループCEO丸氏の軽快で、テンポの良い進行のもと、トークセッションが行われました。その一部をご紹介します。

丸氏から「物理的な移動距離が長くなるカリキュラムを大学院で取り入れたらどうでしょう？」と質問が投げかけられました。すると様々な意見が飛び交い、中でも印象的だったのが理学研究院 正宗教授の発言です。

正宗：異なる複数の文化圏、できれば3カ所以上で生活してみると客観的視野を持ち、相手の立場に立って物事を考えられるコミュニケーションスキルを養うことができるようになるのではないかな…。

丸：まさに3D思考、さらに時間軸を加えた4D思考の重要性を最近強く感じていました。異なる文化、価値観に触れ、理解することで社会を立体的に俯瞰することが可能になります。このような経験は博士人材だけに求められるのではなく、多様性を尊重する社会においてヒューマンスキルとして、とても重要になるでしょう。時間軸が加わることで、世界各地で同時に何が起きているか？あるきっかけで異なる地域が結ばれるかもしれない、といった将来予測も可能になります。

「わからないこと、知らないことは怖いこと」といった気付き

本学博士課程教育物質科学リーディングプログラム（ALP）を修了した、NTT物性科学基礎研究所の高橋氏や株式会社神戸製鋼所の倉氏からは、大学院時代にALPにて異分野と交わることを強く求められ、そこで得た経験や発見が、社会人になって生かされているといった紹介がありました。

倉：大学院在籍中は、研究との両立に悩むことも多かったのですが、途中で

「わからないこと、知らないことは怖いこと」だと気づきました。そんな怖さと戦いながら、新しい知見を得ることを院生時代に経験したことで、現在も知る営みを実践し続け、今では「知る」ことは自身の安心感に繋がっていると感じます。



高橋氏（NTT物性科学基礎研究所）



倉氏（株式会社神戸製鋼所）

「次回は現役大学院生も交えたトークセッションを実施してほしい」

他にも様々なテーマで話が飛び交いました。時には大きな笑いも起こりながらあっという間の2時間でした。オーディエンスとして参加してくれた皆様からは「自分のキャリアパスを考え直すきっかけになった」「もっと話を聞き続けたかった」「次回は現役大学院生も交えたトークセッションを実施してほしい」といった要望が寄せられました。

詳細なレポート、そして動画は近日中に、<https://phdiscover.jp/phd/>で発表しますので楽しみにお待ちください。

主催：北海道大学博士課程教育物質科学リーディングプログラム（ALP）

共催：北海道大学理学部・理学研究院・理学院

協賛：北海道大学数理・データサイエンス教育研究センター

協力：北海道大学電子科学研究所・情報科学研究院・人材育成本部

（理学研究院）

博士人材と企業の情報交換会 第42回「赤い糸会&緑の会」を開催

人材育成本部のS-cubicでは、1月29日（水）に八芳園（東京都港区）にて、本年度第4回（通算第42回）「赤い糸会&緑の会」を開催しました。

本会は、企業には博士人材の高い専門性や総合力を理解いただき、博士人材には企業の研究開発活動や企業における博士人材の活躍状況等を知ってもらうことで、相互理解を深め、視野の複線化、活躍フィールドの拡大を図ることを目的としています。

今回で通算42回目の開催となる「赤い糸会&緑の会」は、参加者も回を重ねるにつれ増加し、博士人材は10部局33名、企業からは20社57名、オブザーバ大学から4校8名が参加しました。また、平成26年度末より採択された科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業により、連携大学から博士人材6名（東北大学2名、お茶の水女子大

学2名、立命館大学2名）も参加しました。

本会では、冒頭の人材育成副本部長の伴戸久徳農学研究院教授による開会挨拶、赤い糸会担当の吉原拓也特任教授による趣旨説明の後、企業から業界動向や博士人材の活躍状況等の紹介が行われ、その後、博士人材の自己紹介ポスター発表、企業ブースを訪問しての個別情報交換等が活発に行なわれました。

開催後、企業からは、「丸1日をかけて学生と話が出来るため、研究だけでなく、人となりもわかる所が良い。規模も適している」「博士人材と企業側が接触できるのは大変良い機会だと思います」との声をいただくことができました。また参加した博士人材からは、「意外なマッチングがあった」「貴重な機会なのでこれからも続けてほし

いです」といった嬉しい声も聞かれました。

人材育成本部では上記の活動のほか、企業事業所視察、Advanced COSA、J-window（個別キャリア相談）、キャリアパス多様化支援セミナー、キャリアマネジメントセミナー、企業での長期インターンシップや、コンソーシアムの連携大学である東北大学や名古屋大学等が運営するプログラムの活用などによって、博士人材の実践力を高めております。今後ともご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

なお、興味のある方は人材育成本部のホームページを是非ご覧ください。

◆<http://www2.synfoster.hokudai.ac.jp>

（人材育成本部）



伴戸副本部長の開会挨拶



吉原特任教授の趣旨説明



企業からの業界動向説明



説明に聞き入る博士人材



博士人材のポスター発表



企業との個別情報交換

■ 部局ニュース

総合化学院創設10周年記念事業を開催

2月21日（金）に、総合化学院創設10周年記念事業として記念式典、研究発表会をフロンティア応用科学研究棟で開催しました。

総合化学院は、現代社会における化学技術発展の必要性、重要性に基づき、社会的な要請に応えるために、理学系化学と工学系応用化学が連携・融合した世界に誇る最先端の化学大学院として、「化学及び化学関連の幅広い専門分野で次世代のフロントランナーになれるトップクラスの研究者と技術者の育成」を教育目標に、平成22年4月に創設された学院です。

記念式典では、武次徹也総合化学院長の開会の辞と総合化学院の概要説明に始まり、笠原正典総長職務代理、堀口健雄理学研究院院長、瀬戸口剛工学研究院院長及び国立研究開発法人物質・材料研究機構の橋本和仁理事長から祝辞（同機構魚崎浩平フェローによる代

読）をいただきました。

次いで、総合化学院の活動内容・成果報告として、国立研究開発法人物質・材料研究機構の魚崎フェローから「総合化学院創設前史」、大熊毅工学研究院教授から「フロンティア化学教育研究センターの活動報告」、石森浩一郎理学研究院教授から「博士課程教育リーディングプログラム～物質科学フロンティアを開拓するAmbitiousリーダー育成プログラム～の報告」、前田^{きとし}理理学研究院教授から「世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）～化学反応創成研究拠点（ICReDD）～の報告」について、それぞれ詳細な報告がありました。さらに、博士後期課程修了生を代表して中川夏美さん（博士後期課程3年）から挨拶があり、最後に「総合化学院への期待」として鈴木章ユニバーシティプロフェッサーからお言葉をいただき

ました。

記念式典に続いて、総合化学院研究室からの学生35名によるポスター発表及び国際連携総合化学プログラム（SV）報告会（派遣学生15名）が行われ、参加学生との意見交換が熱心に行われました。

引き続き、記念祝賀会がファカルティハウス「エンレイソウ」で行われ、武次総合化学院長の開会の辞に始まり、坂口和靖理学研究院教授（第3代総合化学院長）及び大熊工学研究院教授（第4代総合化学院長）の挨拶、鈴木ユニバーシティプロフェッサーの乾杯の発声で開宴となり、最後は大川徹工学研究院教授（次期総合化学院長）の挨拶、乾杯により盛況のうちに閉会となりました。

（総合化学院）



武次総合化学院長の挨拶



笠原総長職務代理祝辞



魚崎フェローの講演



総合化学院学生（中川夏美さん）の挨拶



鈴木ユニバーシティプロフェッサーからのお言葉



研究発表会の様子

北海道大学学芸員リカレント教育プログラム（学芸リカプロ） 公開成果報告会「ミライ・ミュージアム・ミートアップ」及び 公開イベント「動物園・水族館に学ぶ！ミュージアムの可能性」を開催

2月22日（土）、「北海道大学学芸員リカレント教育プログラム（通称、「学芸リカプロ」）」の今年度の公開成果報告会「ミライ・ミュージアム・ミートアップ」と、公開イベントである特論「動物園・水族館に学ぶ！ミュージアムの可能性」を工学研究院フロンティア応用科学研究棟において開催しました。文学研究院が文化庁の助成を受けて取り組んでいる学芸リカプロは、現役のミュージアム学芸員を中心に、様々なかたちで地域文化に携わる方たちに学びの場を提供するというプログラムです。今回は、プログラム参加者による研究・実践成果の報告会と、レクチャーとクロストークで構成された公開イベントとを同日に開催し、ミュージアムや学芸員について大いに語り合う1日となりました。

午前中に行われた報告会の口頭発表では、まず、笠原正典総長職務代理からご挨拶をいただき、学芸リカプロの主旨やこれまでの経緯について、紹介していただきました。続いて、札幌市、小樽市、釧路市、様似町の現役学芸員や、ミュージアムグッズの研究者が登壇し、それぞれの勤務館での実践事例や所蔵資料について5本の研究報

告が行われました。特筆すべきは、プログラム参加者の報告に、来場した一般の方からも活発な質問や意見が寄せられたことです。普段は専門家として活躍している学芸員と一般の市民が、研究や企画のプロセスについて対話をする貴重な機会になるとともに、本プログラム代表を務める文学研究院の佐々木亨教授からも多くのコメントが寄せられ、熱心な議論が交わされました。

また、並行して開催されたポスター発表では、特に12時30分から13時30分にかけてのコアタイム中に、発表者と来場者との質疑応答が行われました。今年度は、合計8本のポスター発表のうち、4本が「農」に関わるものでした。これは、学芸リカプロが次年度に予定している企画展（於北海道大学総合博物館）のテーマが「農」に決定しているためです。これまでに「農」を取り上げてきた企画展の分析や、「農」をテーマとすることの現代的な意義などが報告され、発表者の説明に来場者が耳を傾ける姿がみられました。

続いて、公開イベント「動物園・水族館に学ぶ！ミュージアムの可能性」

を開催しました。学芸リカプロでは人文系ミュージアムを中心的に扱っていますが、今回は同じくミュージアムである動物園や水族館の事例から学ぶという試みです。最初に、基調講演として、生態環境展示の第一人者として知られる大阪芸術大学の若生謙二教授、動物園や水族館のあり方に文化史という観点から光をあてる関西大学の溝井裕一教授が登壇しました。続いて、水族館の展示分析を手がける工学研究院の平 輝助教、北海道立旭川美術館の門間仁史主任学芸員、北海道博物館の亀丸由紀子学芸員が加わり、クロストークを繰り広げました。登壇した門間氏と亀丸氏は、現役の学芸員であり、学芸リカプロで学ぶ受講者でもあります。さらに質疑応答では、来場していた動物園の専門家からも発言が



冒頭の挨拶に立つ笠原総長職務代理



口頭発表の様子



多くの来場者が足を止めたポスター発表会場



基調講演に耳を傾ける様子



クロストークの様子



専門分野を超えた対話が交わされました



会場からも活発な意見が寄せられました

寄せられ、専門領域を横断するディスカッションが展開されました。結果的には、動物園や水族館という館園も包摂する、「ミュージアム」という語の懐の深さが浮き彫りになったと言えるでしょう。最後に、山本文彦文学研究

院長が挨拶に立ち、今回の2つのイベントを総括しつつ、学芸リカプロの今後を展望し、無事に閉会となりました。

(文学研究院)



全体を総括する山本文学研究院長

実施概要

日時：令和2年2月22日（土）10時00分～16時45分

場所：北海道大学工学研究院フロンティア応用科学研究棟
レクチャーホール（鈴木章ホール）・ホワイエ

教育学研究院が北海道教育委員会と連携協定を締結

教育学研究院と北海道教育委員会は、両者の専門性を活かし連携・協力することで北海道教育の充実・発展の資することを目的に、11月1日（金）に連携協定を締結しました。

当日は、北海道庁別館にて調印式が行われ、北海道教育委員会から佐藤嘉大北海道教育長ら9名、当研究院からは宮崎隆志研究院長ら7名が出席しました。

調印式では、佐藤教育長が「協定締結を機に一層連携・協力を深め、地方創生に寄与する北海道教育の充実に期待している」と述べ、宮崎研究院長からは、「持続可能な地域社会の実現に向けた取組を連携・協力して展開していく」との発言がありました。

教育学研究院と北海道教育委員会との間では、これまでも公開研究会の共催や職員研修への相互の講師派遣など

交流を続けてきたところでありますが、さらに調印式後の対話の場では闊達な意見交換が行われ、この度の協定を機に、益々の教育・研究及び地域連携の推進に期待が持たれるところです。

(教育学院・教育学研究院・教育学部)



協定書を交わす佐藤北海道教育長(左)と宮崎研究院長(右)



質問に答える佐藤北海道教育長(左)と宮崎研究院長(右)

教育学研究院が湧別町と連携協定を締結

教育学研究院と湧別町は、1月29日（水）に連携協定を締結しました。

当研究院にて執り行われた調印式には、湧別町から石田昭広湧別町長ら5名、当研究院からは宮崎隆志研究院長をはじめ6名が出席しました。

教育学研究院は、社会との連携を通じて、研究成果を積極的に社会に還元するとともに、研究院の研究活動を広

く発信することを目標に、地方自治体等と連携し、教育課題の解決を充実させることを目指して活動をしてきました。道内の自治体との連携協定は西興部村に次ぐもので、「学校教育および生涯学習」や「地域の福祉」等について相互に協力していくことが合意されました。湧別町と当研究院の連携は、平成30年より「湧別高校魅力化推進事

業」への当研究院教員の協力を契機としており、今後は、大学院生が町の小中学校を訪問しての学習支援や地域の福祉や産業を体験するといった交流も予定され、人材育成をはじめ教育・研究及び地域連携の推進が期待されます。

（教育学院・教育学研究院・教育学部）



挨拶をする宮崎研究院長（左）と石田湧別町長（右）



協定書を交わす宮崎研究院長（左）と石田湧別町長（右）

公共政策大学院が教育課程連携協議会を実施



教育課程連携協議会の様子

1月31日（金）、公共政策大学院（公共政策学教育部）では、法学研究科にて北海道大学大学院公共政策学教育部教育課程連携協議会を開催しました。

平成29年の学校教育法改正に伴う大学院設置基準改正により、専門職大学

院は、産業界等との連携による教育課程の編成実施のために教育課程連携協議会を設けることとなりました。公共政策大学院では、平成31年1月に「教育課程連携協議会内規」を制定し、今回はその規定に基づく初回の協議会を実施したものです。

当日は、教育協議会構成員である遠藤 乾教育部長、鈴木一人教育部副部長、山下直樹委員（財務省主計局国土交通5係 主査）、石田悦一委員（株式会社道銀地域総合研究所 執行役員主席研究員）、高見芳彦委員（北海道地域創生局 局長）の他、学務担当教員等の陪席を得て、大学院の沿革と現状の確認、次年度以降における教育・研究の展開等について、忌憚のない協議を行いました。

ご多忙の中、長時間にわたり私共の説明に耳を傾け、有益なご意見を提供くださった学外委員各位には、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

（公共政策学教育部・公共政策学連携研究部）

経済学部及び会計専門職大学院で特別講演会を開催

経済学部及び会計専門職大学院では、金融庁企画市場局企業開示課課長補佐の伊神智江氏による「コーポレートガバナンスと会計監査をめぐる最近の動向」と題する特別講演会を、1月8日（水）に文系共同講義棟において開催しました。

企業開示課は、企業内容等に係る開示制度及び公認会計士制度の企画・立案、会計基準を設定する企業会計基準委員会との調整、監査基準の設定等、上場企業を対象とする会計・監査制度を所掌しています。会計学や会計監査論を受講する学生にとっては、講義内容との関連が深い業務を行う部署です。

この講演では、コーポレートガバナンス改革の動向として、2018年に改訂が行われた「コーポレートガバナンス・コード」、そして近年改訂された監査基準の要点と、今後の更なる改訂

に向けた現在の動向等について解説がなされました。また、金融商品取引法の下での企業情報開示の充実と会計監査の信頼性確保に向けた取り組みについて、国際的な観点からも具体的に説明されました。

経済学部の会計監査論の受講者、会計専門職大学院の学生をはじめとして、広く学外からも多くの参加があり、およそ50名が聴講しました。特に、実際に日本の会計監査制度を策定する立場にある方のお話であり、たいへん興味深く熱心に聴講していました。

経済学部及び会計専門職大学院では、今後も金融庁や北海道財務局との連携を密にしながら、このような講演会等を開催したいと考えています。

（経済学院・経済学部）



講演する伊神氏



会場の様子

先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2019」を開催



会場の様子

先端生命科学研究院では2月10日（月）に理学部にて令和元年度FDSD研修会「総会2019」を開催しました。今年度も教育・研究担当の全教員及び研究室の事務・技術職員を対象とし、同研究院の諸研究・教育活動報告とともに、理学・生命科学事務部の業務報告も実施しました（出席者総数77名。研究院等教職員44名、事務部30名、他3名）。

今年度のプログラムは2部構成で、（1）教えて！理学・生命科学事務部の活動、（2）第3期中期計画と研究・教育・教育支援環境について行われました。

プログラム（1）では、理学・生命科学事務部の人事担当、会計担当、研究協力担当、外部資金担当、営繕担当、教務担当、大学院教育担当の若手事務職員を中心に業務担当の紹介があり、決裁のプロセスなど教員にとってわかりにくい手続きなどを含め、改めて「なるほど！」という発見がありました。

プログラム（2）では、研究推進では科研費の申請状況、国立大学経営改革促進事業の研究IR評価や若手育成、指定国立大学法人制度、産業創出講座等の本学の現状について、教育改革関連では大学院改革、留学生や交換留学等について、研究・教育環境関連

では短期支援員雇用体制の見直し、メール攻撃訓練、安否確認等について、門出健次研究院長から説明がありました。また昨年に引き続きSDGsと教育について、2020年度より生命科学院シラバスの全開講科目にSDGs目標の関連を見える化する取組を開始する計画について出村 誠副研究院長から紹介がありました。

続いて、次世代物質生命科学研究センターの危険物保管庫設置状況、ゴミ分別の留意などについて先端生命科学

研究院の比能 洋教授から説明がありました。

研修会終了後には先端生命科学研究院と理学・生命科学事務部の意見交換会も行われ、今後の大学教育・研究環境の改善に教員と事務職員との協働意識を更に深めることができました。

（開催概要ホームページ新着情報
<https://life.sci.hokudai.ac.jp/fa/>）

（生命科学院・先端生命科学研究院）



プログラム（1）
理学・生命科学事務部担当者からの説明1



プログラム（1）
理学・生命科学事務部担当者からの説明2



プログラム（2）門出先端生命科学研究院長



プログラム（2）環境・安全 比能教授

歯学研究院長がウメオ大学歯学部を訪問

2月10日（月）に、八若保孝歯学研究院長がスウェーデン王国ウメオ大学歯学部を訪問しました。

本学歯学研究院・歯学部とウメオ大学との交流は、1983年にDr. Berit Ardlin（元 ウメオ大学Dept.of Odontology/Dental Materials Science准教授）が本学歯学部歯科理工学教室に留学していたことに始まります。それ以降も相互交流を継続し、2015年度より、本学の海外ラーニング・サテライト（LS）事業として、本学歯学部から毎年6年生2名程度をウメオ大学歯学部へ派遣し、同学部の臨床教育を中心とした授業・実習に参加する他、毎年ウメオ大学からも教員・学生各1～2名をLS事業や歯学部独自の予算で受け入れるなど、交流を続けています。

今回の訪問では、学生の受入対応を

していただいているウメオ大学のTomas Lindh准教授の案内により、派遣学生の授業・実習の様子及びウメオ大学歯学部・同学部附属病院の施設を見学し、見学後に開催された夕食会には同学部のAnders Wänman学部長をはじめとした関係者の方々も出席し、意見交換が行われました。

本学とウメオ大学では2013年に大学間交流協定を締結していますが、

Anders Wänman学部長からは、LS事業にとどまらない同学部の最新機器を用いた実習への学生の受入など、相互交流継続の提案をいただき、部局間交流協定の締結も視野に入れた具体的な交流がより一層前進することが期待されます。

（歯学院・歯学研究院・歯学部）



施設見学の様子



夕食会参加者の集合写真

令和2年度薬学実務実習開始セレモニーを挙行

薬学部では、2月12日（水）に令和2年度薬学実務実習開始セレモニー「臨床現場へあがるための心得」を挙行了しました。

本セレモニーは、薬学科学生が実務実習（病院実習・薬局実習）に臨むにあたり毎年実施しているもので、学生は、実習中のユニフォームとなる真新しい上下の白衣に身を包み、引き締まった面持ちで参加していました。

セレモニーには、佐藤美洋薬学部

長、松永茂樹教務委員長、実務実習担当教員らが出席し、実務実習の趣旨や学生に期待すること、今年度実施された実務実習をふまえての注意点などとともに、激励の言葉が伝えられました。

受入施設からは、北海道大学病院薬剤部の菅原 満薬剤部長、株式会社アインファーマシーズの佐々木志織氏、株式会社ツルハの中村文哉氏、株式会社なの花北海道の井野千枝子氏が出席

し、臨床の現場・患者さんに直接接する場で実習に臨む際の心構えなどが伝えられ、学生たちが神妙に聞き入る様子が見られました。

また、佐藤薬学部長から学生一人ひとりへ実習中着用するネームプレートが手渡され、病院・薬局合わせて5か月に及ぶ実習への壮行となりました。

（薬学研究院・薬学部）



激励の言葉をかける菅原薬剤部長



ネームプレートを手渡す佐藤薬学部長



熱心に聞き入る学生たち

工学系部局で転倒防止活動への取組みを実施

工学系部局では、冬季間の転倒防止対策として、滑り止め用の砂を入れたペットボトルを材料・化学系棟正面玄関及び材料・化学実験棟玄関に配置しました。

この取組みは、学生及び教職員が路面凍結により転倒しやすい状況となる

ことがあるため、玄関の利用者が砂を散布することで転倒のリスクを軽減させるものです。砂を入れたペットボトル容器の配置期間は、11月から4月下旬までを予定しており、その間、順次補給を行います。

工学系部局では、今後も学生及び教

職員の安全衛生管理の向上を目指した取組みを進めていきます。

(工学研究院、情報科学研究院、量子集積エレクトロニクス研究センター)



材料・化学系棟正面玄関前に砂を撒く島田敏宏
安全衛生管理室長



材料・化学系棟正面玄関風除室の配備状況
(右：砂入りペットボトル、左：空ペットボトル回収ボックス)



滑り止め用の砂を入れたペットボトル

厳冬期避難所展開・宿泊演習2020に出席

1月25日(土)・26日(日)に、日本赤十字北海道看護大学災害対策教育センター(北見市)主催による厳冬期避難所展開・宿泊演習2020が日本赤十字北海道看護大学にて開催され、冬期災害時対応の向上のため工学研究院等安全衛生管理室から職員2名が出席しました。

本演習は、当該大学で研究が推進されている冬期に災害が生じた際の対応策を実践的に明らかにすることを目的に開催されているものです。

当日は、体育館を避難所に見立て、

既存の暖房機器やトイレなどが使用できない状況設定の下、宿泊や炊き出しが実施されました。体育館床の素足と、上履き、ブルーシート、毛布等をそれぞれ用いた場合の冷感の違い、避難所のゾーンニングの考え方、シェルター及び段ボールベッドの設営、炊き出しの方法、簡易トイレの展開など具体的な対応策を学ぶことができました。

工学研究院等安全衛生管理室は、今後も防災や災害対策に係る演習等に出席し、より実践的な災害時対応の向上

に努めていきます。

(工学院・工学研究院・工学部、情報科学院・情報科学研究院、量子集積エレクトロニクス研究センター)



演習の説明を行う日本赤十字北海道看護大学の
根本昌宏災害対策教育センター長・教授



避難所寝袋体験



ブルーシート展開演習



段ボールベッド宿泊演習

水産科学院・水産学部主催「業界研究セミナー」を開催

2月7日（金）・8日（土）に函館国際ホテルにおいて、函館キャンパスの学生を対象とした業界研究セミナーを開催しました。本セミナーは、キャリア支援の一環として、ブース形式で企業の採用担当者と面談を行う機会を設け、面接など本格的な選考過程に入る前に、企業等への理解を一層広げ深めてもらうことを目的として実施しています。

函館キャンパスの学生は、東京や札幌等の主要な都市で行われている合同企業説明会や就職活動セミナー等に参加することが地理的・時間的に難しく、企業の皆様と直接対面し、コミュニケーションをとる今回のセミナーは大変重要な機会となっています。

参加企業は、日本水産株式会社、よつ葉乳業株式会社をはじめとする食品会社や大手海運会社の日本郵船株式会社、商船三井株式会社などの人気企業に加え、大塚製薬株式会社、大正製薬株式会社などの大手製薬会社や、IT、

流通、小売、官公庁など幅広い業界にわたり、2日間で59社が参加しました。

さらに、就職情報会社による就職相談コーナーも設け、就職活動全般の相談やエントリーシート添削等を希望する学生の対応にあたってくださいました。

本セミナーは1回40分サイクルで、1日6回までの説明を聞くことができるスケジュールで組まれ、企業ブースを訪問した学生は、これまでの企業研究を活かしながら集中力を持続させ、真剣な眼差しで採用担当者の生の声に耳を傾けており、また積極的に採用担

当者へ質問をするなど、非常に熱心な様子が見られました。

学生は、限られた時間を上手に利用し就職相談コーナーを利用するなど、参加者はそれぞれの方法で本セミナーに参加していました。2日間で延べ127名の学生が参加し、盛況のうちに終わることができました。

この取組みは、今後もキャリア支援の一環として、より一層充実させた形で継続していく予定です。

（水産科学院・水産科学研究所・水産学部）



採用担当者の声に耳を傾ける学生



国際広報メディア・観光学院がシェフィールド大学との教育・研究交流「TLLPワークショップ」を開催

国際広報メディア・観光学院では、1月14日（火）・15日（水）に「タンデム・ランゲージ・ラーニング・プロジェクト（Tandem Language Learning Project: TLLP）・ワークショップ」を開催しました。

TLLPとは、国際広報メディア・観光学院、メディア・コミュニケーション研究院、英国シェフィールド大学、リーズ大学、フィンランド・ヘルシンキ大学、オーストラリア・メルボルン大学の間で行われている研究教育の交流プログラムです。このプロジェクトの目的は、①学生・教員を含めた双方の研究交流及び研究ネットワークの構築、②研究遂行（データ収集、インタビュー、研究発表、研究討論）のために必要となるアカデミックな言語スキルの獲得にあります。具体的な教育プログラムの内容は、両大学の大学院生同士がペアを組み、互いに相手の研究、発表のサポートをするタンデム・ラーニング、またその進展をオンライン上で支援する教員のアドバイス・システムが中心です。さらに、相互に相手の大学を訪問して研究発表や教育交流を行う「TLLPワークショップ（ス

タディ・ウィーク）」を年に1～2回開催しています。

今回本学で開催したワークショップには、シェフィールド大学から大学院生3名と教員1名が参加し、本学院から参加した大学院生3名と共に、学生による研究発表やディスカッション、教員による講義やワークショップなど、様々な研究・教育交流を行いました。TLLPの趣旨に基づき、本学の学生は英語で、シェフィールド大学の学生のうち2名は日本語で研究発表を行いました。本学院の教員や学生など多くの人が発表を聴きに集まり、活発な意見交換や今後の研究のためのアドバイスがされました。発表した学生は別のセッションの司会も担当し、学会などでどのようにセッションの司会進行

をするかを体験できる機会となりました。2ヶ月間にわたり、発表要旨、パワーポイント、発表原稿などについてお互いの研究をオンライン上で研鑽してきた成果がワークショップで発揮されました。

2014年以降開催されてきたTLLPスタディ・ウィークは今年で6年目を迎えました。来年度は本学院の学生がヘルシンキ大学に派遣される予定です。今後も国際社会を舞台に活躍する研究者を育成することを目指し、海外諸大学との教育・研究交流を続けていきます。

（国際広報メディア・観光学院、メディア・コミュニケーション研究院）



シェフィールド大学学生による発表風景



シェフィールド大学教員の挨拶

「本は脳を育てる」 図書展示を開催

12月12日（木）～1月22日（水）にかけて、附属図書館（北図書館）において、「本は脳を育てる：図書展示」を開催しました。

「本は脳を育てる：北大教職員による推薦図書」は、本学の教職員が学生のために選んだ、「これ！」という図書等を推薦コメントつきで紹介するサイト（<https://www.lib.hokudai.ac.jp/book/>）です。「勉強以外でも、たくさん本を読んでおきたい！」「社会に出る前に教養を身に付けたい！」など、学生の『本探し』を支援しています。

展示では、「本は脳を育てる」で公開中の約523点の資料のうち新着を中心に、81点を推薦者の熱のこもったコ

メントと共に展示しました。期間中61点が延べ133回貸し出され、展示スペースではコメントに見入りながら本を選ぶ学生の姿が見られました。

「本は脳を育てる」では常時教職員の推薦コメントを上記ウェブサイト

（附属図書館）



図書展示の様子



研修出張報告会「オープンサイエンス・研究データ関係」を開催

2月4日（火）、附属図書館で、研修出張報告会「オープンサイエンス・研究データ関係」を開催し、図書館職員、他部局の教員など20数名の参加がありました。

附属図書館では、研修や出張によって得られた成果を職員間で共有するため、このような報告会を毎年2回程度開催しています。今回はその特別編と

して、オープンサイエンス・研究データ関係のテーマに特化して開催し、以下4件の報告がありました。我が国でも近年必要性が高まってきている研究データの取扱い等に関して、先行する海外大学の事例や、各種団体の動向の紹介等を通じて理解が深まり、新たな課題等を認識することができた報告会でした。

発表資料は、北海道大学学術成果コレクションHUSCAPで公開しています。以下URLにアクセスしてご覧ください。

◆<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/76788>

（附属図書館）

<報告内容>

- ・オーストラリアの大学図書館におけるオープンサイエンス・研究データ管理の先行事例調査：
シドニー大学、ニューサウスウェールズ大学、メルボルン大学、モナシュ大学
研究支援課 理学部図書担当 佐藤亜紀
管理課 図書受入担当 児玉陽子
- ・国立情報学研究所実務研修@オープンサイエンス基盤研究センター
研究支援課 研究支援企画担当 三上絢子
- ・九州大学シンポジウム・ワークショップ「大学における研究データサービス」
研究支援課 研究支援企画担当 堀越邦恵
管理課 図書受入担当 児玉陽子
- ・研究データに関する各種団体の動き：
国大図協OA委員会、JPCOAR研究データ作業部会、AXIES RDM部会
研究支援課長 結城憲司

令和元年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏・水圏ステーション技術職員専門研修を開催

北方生物圏フィールド科学センターでは、1月28日（火）から30日（木）に、令和元年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏・水圏ステーション技術職員専門研修を開催しました。この研修は、本学及び道内大学のフィールド系技術職員を対象に、職務に必要な専門的知識や技術等を広く修得させることを目的として実施したものです。今年度は、26名（帯広畜産大学からの1名を含む）が参加し、「GAP（Good Agricultural Practice：農業生産工程管理）」「ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）」をキーワードに、施設見学及び実演、意見交換会、講義を行いました。

初日は、技術職員5名の技術発表の後にGAP関連の3講義が行われ、農学研究院の清水池義治講師による「GAPの概念と社会的意義」では、EUと日本でのGAPの政策的な違いや概念など基礎的なことをお話しいただきました。国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（以下、農研機構）北海道農業研究センター・澁谷

美紀主席研究員による「北海道農業研究センターにおけるJGAPの取り組みと展開」、NECソリューションイノベータ株式会社イノベーション戦略本部の中橋賢一氏による「GAP認証支援サービスについて」では、GAPの認証取得について実例を中心にお話しいただきました。この他に、ベジョー・ジャパン株式会社の熊野貴宏代表取締役による「共同研究から得られた成果—北大農場から世界へ—」の講義と受講者全員の自己紹介も行いました。講義終了後には懇親会が開かれ、佐藤冬樹センター長や講師の先生も交え、大いに親睦を深め、新たな人的ネットワーク作りの機会ともなりました。

2日目午前は、地方独立行政法人北海道立総合研究機構水産研究本部さけます・内水面水産試験場を訪問し、試験場の概要や「水カビを発生させないための受精卵の消毒及び培養方法」「飼育器具の洗浄・消毒方法」等について説明を受けた後、飼育槽のある水産養殖施設を見学しました。午後は、農研機構種苗管理センター北海道中央

農場を訪問し、全国にある同センターの農場配置や主要業務、バレイショ原種の生産・配布の現況、新品種の早期増殖方法である「組織培養とミニチューバーの生産による原原種生産」について説明を受けた後、生産施設を見学しました。見学中には、施設における技術継承上の課題や農業機械の更新等についての情報交換もできました。

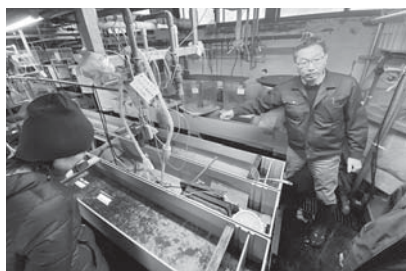
最終日は、農学研究院の笠井美青准教授による「近年の土砂災害とその対策」、地球環境科学研究院の野田隆史教授による「海岸線の環境と生物」の講義が行われ、研修は終了となりました。

本研修を通して、最新の研究等に関する情報を得るだけでなく、各施設における業務内容についての相互理解や技術交流・親睦が深められました。開催にあたりご指導・ご協力・ご講演いただいた先生方、視察を受け入れていただきました各施設の方々に深くお礼申し上げます。

（北方生物圏フィールド科学センター）



中橋氏による講義



さけます・内水面水産試験場養殖施設



種苗管理センター北海道中央農場ミニチューバー生産温室

北海道大学病院の医療スタッフがHBCラジオで健康情報を発信！

北大病院の医師が月替わりで出演するラジオ番組、わかもと製薬presents「ナルミツ！！ 健康長生き北海道！」が好評につき、4月以降も継続して放送されます。

4月からは、北大病院のチーム医療を体現すべく、医師のみならず薬剤師や看護師といった医療スタッフも出演予定であり、月毎にテーマを決め1年間、健康に関する話題を提供していきます。さらに、ラジオリスナーから事

前に募集した悩み事に対してお答えする新たな試みも始まります。

2月7日（金）には、腫瘍内科教授の秋田弘俊病院長が出演する4月放送分の収録が行われ、和やかな雰囲気の中、順調に収録を終えました。

4月は「がん治療」をテーマに、がん治療法の新しい技術のひとつである「分子標的治療薬」から医療ソーシャルワーカーや産業医の話題まで、多岐にわたってお話ししています。

radiko（ラジコ）*を利用して放送後にも再生できますので、ぜひお聴きください。

*ラジオ番組をパソコンやスマートフォンで聴くことができるサービス。道内エリアでは放送日から1週間、無料で聴くことが可能。

（北海道大学病院）

（番組概要）

HBCラジオ わかもと製薬presents「ナルミツ！！ 健康長生き北海道！」
毎週火曜日 10：25～10：30

※平日午前ワイド番組「気分上昇ワイド ナルミツ！！」内で放送

放送月	テーマ	出演者			
4月	がん治療	腫瘍内科	教授	秋田 弘俊	
5月	目の病気	眼科	教授	石田 晋	
6月	薬	薬剤部	部長	菅原 満	
7月	歯と口の病気	歯周・歯肉療法科	教授	菅谷 勉	（確定分）



パーソナリティの石井麻子さんと秋田病院長（左）



HBCラジオスタジオでの収録

■ 定年を迎えるにあたって

本年3月31日限りで定年を迎える方々のお言葉と略歴を紹介します。

法学研究科教授

かとう ともゆき
加藤 智章 氏



振り出しの山形大学人文学部に10年、阪神淡路大震災の年から新潟大学法学部に14年、そして2009年4月から24年ぶりに北海道大学法学部に戻ってきました。

北大にはあと1年残ることとなりますが、この間、特にゼミ活動を通して、多くの学生と裁判例や論文を題材にして議論をしたり、様々な施設を訪問することができました。学生たちとお酒を飲みながら話す機会がなくなることが残念でなりません。研究会活動を中心とした教育研究の場面では、同僚の先生方から多くの刺激を受けることができました。幸い研究活動には定年がないので、これからも研究会には参加したいと考えています。さらに、学内行政の場面では、教員や職員の皆様に支えられながら、何とか研究科長職を果たすことができました。多くの課題を残したままの引き継ぎになりましたことなど、反省材料ばかりですが、教員や職員の皆様には心よりお礼申し上げます。

昔、中央図書館の前にこぶしの木がありました。改築に伴い伐採されてしまいました。建物を建てるだけでなく、22世紀にも見応えのある植生を維持することを最後にお願ひして、定年のご挨拶とさせていただきます。

法学研究科教授

つねもと てる き
常本 照樹 氏



学生及び教員として35年間北大に籍を置かせていただいた中で思い起こされることは、とりわけ初代の総長補佐として5年に渡って大学改革に関わったことです。いわゆる学院・研究院構想をまとめたのはこのときでした。NTTの研修所で合宿をして学院・研究院という名前を決めたことが思い出されます。総長からの特命を担当していた総長補佐を、総長室として組織化したのも同じ丹保総長の時代でした。中村総長の下では法人化のための初めての中期目標・計画及び「基本理念と長期目標」の策定に携わりました。中期計画の中に書き込んだアイヌ・先住民研究センターのセンター長を拝命したときには、それが13年間も続くとは夢にも思いませんでした。その間に研究科長も務めることになり、北大の中にイスが3つもあったものです。アイヌ・先住民研究センターが発足した翌年から国によるアイヌ政策の検討が始まり、今に至るまでそれへの関与が続いていますが、その中で、自らの信念に従って進むことの辛さを思い知らされることもありました。それでも、こうして定年を迎えることができたのは、ひとえに同僚、事務職員の皆様の支えがあったからにほかなりません。心からお礼申し上げます。

略 歴

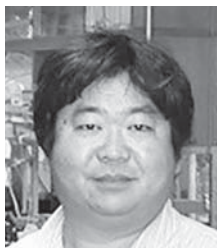
昭和54年3月 小樽商科大学卒業
昭和57年3月 北海道大学大学院法学研究科法学修士課程修了
昭和60年5月 北海道大学大学院法学研究科博士課程単位修得退学
平成3年5月 法学博士（北海道大学）
昭和60年6月 山形大学人文学部講師
昭和63年10月 山形大学人文学部助教授
平成7年4月 新潟大学法学部教授
平成16年4月 新潟大学人文社会・教育科学系教授
平成19年4月 新潟大学法学部長
平成21年4月 北海道大学大学院法学研究科教授
平成26年12月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
平成28年12月 }
平成28年12月 北海道大学大学院法学研究科長

略 歴

生 年 月 日 昭和30年10月9日
昭和53年3月 北海道大学法学部卒業
昭和55年3月 北海道大学大学院法学研究科修士課程修了
昭和58年3月 北海道大学大学院法学研究科博士課程修了
昭和58年3月 法学博士（北海道大学）
昭和58年4月 北海道教育大学教育学部助手
昭和59年10月 北海道教育大学教育学部講師
昭和61年10月 北海道教育大学教育学部助教授
平成5年4月 北海道大学法学部教授
平成12年4月 北海道大学大学院法学研究科教授
平成15年4月 北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター教授
平成16年4月 北海道大学大学院法学研究科教授
平成18年12月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
平成20年12月 }
平成19年4月 北海道大学アイヌ・先住民研究センター長
平成20年4月 北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター教授
平成20年12月 北海道大学大学院法学研究科長

水産科学研究院教授

あだち しんじ 氏
足立 伸次 氏



四十数年前「北大水産学部，世界初，ウナギの人工ふ化成功」という新聞記事が全国に流れた。私は北大水産学部受験を決意した。水産学部入学後，幸い，淡水増殖研究室で山内皓平助手（当時，その後教授，水産学部長，名誉教授）とウナギの排卵培養実験に携わることができた。卒業後の1980年からは基礎生物学研究所で研究室の先輩である長濱嘉孝助教授（当時，その後教授，副研究所長，名誉教授）のもとで魚類の生殖制御機構の研究を引き続き行なうことができた。基生研ではサケマス類の卵成熟誘起ホルモンを脊椎動物で初めて同定することに成功した。1991年に北大水産学部に助手として戻った後もサケマス，ウナギおよびチョウザメ類の性分化および卵成熟機構に関する研究を継続することができ，これら基礎研究の成果は北海道産チョウザメ類の国内初の繁殖成功などにも繋がった。また，山内学部長のリーダーシップのもと，安井教授，都木教授らとともに産学官連携プロジェクトにも貢献できた。

振り返ると，山内先生と長濱先生との出会いがこの上ない幸運であった。多くの成果は両先生，スタッフ，200人に及ぶ学生さん，多くの共同研究者の方々の協力の賜物であり，心よりお礼を申し上げる。特に，井尻成保准教授という優れた後継者を得たことは更なる果報であり，同氏に深く感謝する。今後は特任教授として，引き続き教育研究と社会実装に微力を尽くす所存である。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年 9月28日
昭和55年 3月	北海道大学水産学部卒業
昭和55年 7月	生物科学総合研究機構基礎生物学研究所文部技官
昭和56年 4月	岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所文部技官
平成 3年 3月	北海道大学水産学部助手
平成 5年 4月	北海道大学水産学部講師
平成 7年12月	博士（水産学）（北海道大学）
平成 8年 4月	北海道大学水産学部助教授
平成12年 4月	北海道大学大学院水産科学研究科助教授
平成17年 4月	北海道大学大学院水産科学研究院教授
平成26年 4月	北海道大学教育研究評議会評議員
平成28年 3月	

水産科学研究院教授

みやざわ はるひこ 氏
宮澤 晴彦 氏



私は本学水産学部に助手として採用された後，1年余りで東京水産大学に新設された資源管理学科に転出しています。当時は200カイリ体制成立の影響を受け遠洋漁業，とりわけ北洋漁業の衰退傾向が顕著となり，沿岸漁業の価値が大きく見直されつつありました。つまり，日本近海・沿岸の水産資源をいかにして有効かつ持続的に利用していくか，そして資源管理と漁業経営の維持・安定化をいかにして両立させるかが重要な課題とされていたのです。そのような時期に，新設された資源管理学科に所属することができたのは，私にとって大きな刺激となるものでした。

しかし，上述の課題に関する研究において，最善のフィールドを提供してくれるのは東京ではなく北海道でした。私の大学生活のスタート時点と後半の十数年を北海道大学で過ごせたのは，私の人生において大変有意義であったと今更ながらに思います。そのことに感謝しつつ，道半ばの研究をこれからも微力ながら地道に続けていきたいと今改めて思っております。

略 歴

生 年 月 日	昭和30年 4月15日
昭和53年 3月	北海道大学水産学部卒業
昭和56年 3月	北海道大学大学院水産学研究科漁業学専攻修士課程修了
昭和59年 9月	北海道大学大学院水産学研究科漁業学専攻博士課程単位修得退学
昭和59年10月	日本学術振興会奨励研究員
昭和60年 4月	財団法人水産科学研究奨励会研究員
昭和62年 4月	日本学術振興会特別研究員
昭和62年 9月	北海道大学大学院水産学研究科漁業学専攻博士課程修了
昭和62年 9月	水産学博士（北海道大学）
昭和62年12月	北海道大学水産学部助手
平成 1年 1月	東京水産大学水産学部助教授
平成13年12月	北海道大学大学院水産科学研究科助教授
平成17年 4月	北海道大学大学院水産科学研究院助教授
平成19年 4月	北海道大学大学院水産科学研究院准教授
平成29年 1月	北海道大学大学院水産科学研究院教授

水産科学研究院教授

みやした かず お
宮下 和夫 氏



ありきたりではありますが、北大の教員として働き始めてもう35年近くが過ぎてしまったかと思うと、時の流れの速さにただ驚くばかりです。助手として勤務し始めた頃は、時間はたっぷりあり、研究業績などは湯水のように沸いて出てくるかのような錯覚を持ったものです。ただ、当然、そのような魔法はあるはずもなく、時間の割にはこんなものかと自戒するのみです。

とはいえ、研究室から卒業・修了された学生の皆さんのことを思うとき、研究業績や論文数などよりも、もっと大切なことがあったことを改めて実感します。才能にあふれた学生の皆さんと35年近く接したことは、私の宝物です。自分自身もそうであったように、たぶん人生の中で最も輝いている時間を彼女・彼らと共有できた（と勝手に思っているのですが）ことは、大学人として最も誇れるものと感じています。時々、卒業・修了された学生の皆さんが研究室を訪問してくれますが、社会でそれぞれの役割を果たしている様子を伺うことは、何よりの楽しみです。これからは、若い人にあまり迷惑をかけないように、その活躍を眺めていきたいと願っております。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年 8月18日
昭和54年 3月 東北大学農学部卒業
昭和57年 3月 東北大学大学院農学研究科食糧化学専攻博士課程前期修了
昭和60年 3月 東北大学大学院農学研究科食糧化学専攻博士課程後期修了
昭和60年 3月 農学博士（東北大学）
昭和60年 7月 北海道大学水産学部助手
平成 7年 4月 北海道大学水産学部助教授
平成12年 4月 北海道大学大学院水産科学研究科教授
平成17年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院教授
平成26年 4月 } 北海道大学大学院水産科学研究院副研究院長
平成30年 3月 }

水産科学研究院教授

やす い はじめ
安井 肇 氏



令和2年3月末の定年退職にあたり、学生時代と教員時代のあわせて44年間にわたりお世話になった北海道大学の教職員、事務職員、同窓生の皆様に、ひとことお礼とお別れのご挨拶を申し上げます。私は子供の頃、小さい自転車で行く京都高雄の清滝川に参り、日がな一日水辺でカジカガエルや水生昆虫と遊んでおりました。ときおり空を見上げると白い雲がゆっくり流れ、「あの向こうにどんな世界があるのかなあ。」などと思っておりました。家では棒鮭、塩鮭、身欠き鯊、昆布がとても大事にされていて、これらを生み出す北海道は無闇にすごいという気配がありました。あるとき私が「海で昆布はどう生えてんのや。」と問うても家族の誰も答えられず、不思議やなあという感覚が残りました。北海道大学に来てからは水産植物、大形海藻、増殖生物学を通して多くのかけがえのない人々に出会い、研究と教育のなかで宝物のような深い考えや景色に接することができました。持続可能性の水産科学が人々の生活や健康に繋がり自然を増々豊かにする学問体系として進展することを願っています。平安期末の今様（梁塵秘抄）は「遊びをせんとや生れけむ、戯れせんとや生れけん、遊ぶ子供の声きけば、我が身さえこそゆるがるれ。」と謡っています。今、時の流れの音で我に返った私は何十年もずっと水辺で過ごした長い夢から覚めた心地です。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年 4月24日
昭和55年 3月 北海道大学水産学部卒業
昭和59年 3月 北海道大学大学院水産学研究科水産増殖学専攻修士課程修了
昭和62年 4月 北海道大学大学院水産学研究科水産増殖学専攻博士後期課程単位修得退学
昭和62年 5月 北海道大学水産学部助手
平成 3年12月 水産学博士（北海道大学）
平成 6年 4月 北海道大学水産学部助教授
平成 9年 3月 } イタリア・ナポリ臨海実験所派遣研究者
平成 9年 7月 }
平成12年 4月 北海道大学大学院水産科学研究科助教授
平成17年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院助教授
平成19年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院准教授
平成22年 8月 北海道大学大学院水産科学研究院教授
平成26年 4月 } 北海道大学大学院水産科学研究院長・水産科学院長・水産学部長
平成30年 3月 }

理学研究院教授

おいかわ ひであき
及川 英秋 氏



農学部卒論学生時代に、植物や微生物が創る複雑で強力な生物活性を示す小分子に出会いました。この小分子は医薬品としても役に立ちますが、生物が何故多大なエネルギーを使って合成するのが未解明でした。そうした分子を見つけ、生物がありふれた材料から如何に作り出すかを解明するのは面白い経験でした。その不思議さに惹かれ、研究を続けるうちに、あっという間に40年以上が経ってしまいました。最初は、単純な有機化学の問題でしたが、その後この研究領域は酵素機能解析、遺伝子工学、バイオインフォマティクス、構造生物学、計算化学と急激に進展する研究手法を貪欲に取り込んで広がる様子を、リアルタイムで体験させてもらいました。学生時代には、複雑小分子の合成は有機合成の世界的権威が競っていました。当時は一人の学生が合成するのは到底無理でしたが、現在はゲノム解析で見つけた専用の酵素触媒を使えば、いとも簡単に合成するのを目の当たりにできます。所属が農学部から理学部に移るなどして様々な学生や多くの研究者と大学ならではの体験をさせていただきました。関係各位に御礼を申し上げます。この3月で定年ですが、残る2年間も学生諸氏と楽しみたいと思います。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年11月8日
昭和54年 3 月	北海道大学農学部卒業
昭和56年 3 月	北海道大学大学院農学研究科修士課程修了
昭和59年 3 月	北海道大学大学院農学研究科博士課程修了
昭和59年 3 月	農学博士（北海道大学）
昭和59年 4 月	米国ブラウン大学化学科博士研究員
昭和60年 9 月	
昭和61年 4 月	北海道大学農学部助手
平成11年 4 月	北海道大学大学院農学研究科助教授
平成15年 4 月	北海道大学大学院理学研究科教授
平成18年 4 月	北海道大学大学院理学研究院教授

薬学研究院教授

いせき けん
井関 健 氏



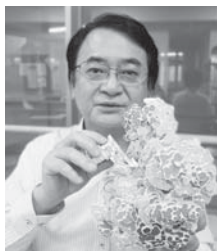
大学を卒業し、病院薬剤師として仕事をしていましたが、途中から大学の教育・研究に関わるようになり40年近く北海道大学でお世話になることになった。その間、薬学部の大大学院重点化、独立行政法人化を経て、大学教員の在り方はずいぶん様変わりして、その社会的な役割も大きく変化したと思われる。特に薬学教育は6年制教育が平成18年4月から導入され、日本の薬学教育（特に国立大学薬学部）は、それまでの基礎薬学・創薬科学研究者の養成から、臨床能力を有する薬剤師養成教育に責任を持つ方向へ大きく転舵することになった。

以来、北海道大学薬学部は、「薬剤師」という医療資格を待たなければ現場のデータを扱うことができない臨床薬学・医療薬学の研究者と創薬科学・医薬品開発を目指す基礎生命科学の研究者という2種類の研究者育成を志向する大学院薬学研究院・生命科学院という教育理念を掲げ、私共のような医療現場出身の教員を導入して今に至っている。近年は、研究能力を備え臨床で活用できる医療人としての薬剤師を北海道大学から輩出できていることに安堵しながら、この大学を無事に去れること、さらには長い間、一緒に頑張ってくれた仲間と、支えてくれた研究室スタッフに改めて感謝したい。

略 歴

生 年 月 日	昭和30年7月7日
昭和54年 3 月	北海道大学薬学部卒業
昭和56年 6 月	北海道大学大学院薬学研究科退学
昭和56年 7 月	北海道大学医学部附属病院薬剤部薬剤師
昭和61年 9 月	薬学博士（北海道大学）
昭和62年12月	北海道大学医学部附属病院助教授
昭和63年 5 月	ケンタッキー大学薬学部客員研究員
平成元年12月	
平成12年 2 月	北海道大学大学院薬学研究科教授
平成18年 4 月	北海道大学大学院薬学研究院教授
平成18年10月	北海道大学病院薬剤部長併任（平成31年3月 薬剤部長退任）

農学研究院教授

ないとう ざとし
内藤 哲 氏

私の研究分野を大きくりに言えば、実験生物学です。未知の現象を前にして仮説を立て、その仮説を実験的に検証する、ということの繰り返しです。北大の学生さんたちと付き合いはじめて最初に感じたのは、議論を戦わせていったん仮説を立てれば、すくなくとも次の議論まではグタグタ理屈をこねずに、とにかく実験！という学生さんが多いことでした。私の仕事は、卒研は卒研なりに、大学院は大学院なりに、年限の範囲で、議論・仮説・検証のサイクルを回して、その現象をもたらし分子機構の解明に近づけることです。議論を重ねても、私が主張した仮説が大間違えて、苦しい時間を与えてしまったこともありましたが、そんな時こそ、大きな発見につながるということを体験してもらえたこともありました。また、十分な指導ができた学生さんばかりではありませんが、それでも、持つべきものの見方や考え方を身につけて巣立ってくれたのではないかと思います。北大に赴任して27年8ヶ月、思えば、戦い甲斐のある学生さんたちに恵まれた幸せな教員生活でした。

ただし、もう一言、書かざるを得ないでしょう：昨今の教育研究をめぐる諸問題の中、大志を語るClarkたらんと欲しても、clerkとしての仕事に割かねばならない時間がどんどん増えてしまっているのが残念でなりません。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年8月23日
昭和53年3月 東京大学理学部生物化学科卒業
昭和55年3月 東京大学大学院理学系研究科生物化学専門課程修士課程修了
昭和58年3月 東京大学大学院理学系研究科生物化学専門課程博士課程修了
昭和58年3月 理学博士（東京大学）
昭和58年4月 東京大学医科学研究所助手
昭和59年2月 東京大学遺伝子実験施設助手
平成4年7月 北海道大学農学部助教授
平成6年10月 北海道大学農学部教授
平成11年4月 北海道大学大学院農学研究科教授
平成18年4月 北海道大学大学院先端生命科学研究院教授
平成22年4月 北海道大学大学院農学研究院教授

農学研究院教授

は た の りゅうすけ
波多野 隆介 氏

三重県立四日市高校を卒業し、昭和49年3月3日に文連の軍艦講堂で憧れの北大を受験しました。中央道路はまだ舗装されておらず大きな池になっていました。受験が終わったその日の最終便は雪で飛ばず、「急行はまなす」で帰ることになりました。農学部へ居た高校の先輩が二条市場近くの飲み屋に連れて行ってくれました。おでんを食べ、温かい気持ちになり、絶対に北大に来ようと思いました。あれから46年私は憧れの北大で過ごすことが出来ました。お世話になった皆様には心からお礼申し上げます。しかし北海道の冬は北九州若松生まれの私には過酷でした。一方四日市で苦しんだ喘息は北海道に来てからは無くなりました。環境に暮らしが影響を受けることを実感してきました。土壌学研究室での研究のほとんどは、土壌物質動態の環境影響評価でした。シベリアの永久凍土、インドネシアの泥炭土壌など極端な脆弱土壌を研究させていただきました。いずれも人間活動がきっかけで破壊がはじまり気候変動により修復せず、土壌有機物の分解が進み、温室効果ガスを排出しながら疲弊していきます。まるで地球の喘息です。「持続可能性を強化する」を次のテーマに研究したいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年1月14日
昭和53年3月 北海道大学農学部農芸化学科卒業
昭和55年3月 北海道大学大学院農学研究科農芸化学専攻修士課程修了
昭和57年4月 北海道大学農学部助手
昭和61年12月 農学博士（北海道大学）
昭和63年7月 北海道大学農学部助教授
平成7年4月 北海道大学農学部教授
平成11年4月 北海道大学大学院農学研究科教授
平成13年4月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教授
平成18年4月 北海道大学大学院農学研究院教授

農学研究院教授

ばん ど ひきのり
伴 久徳 氏



40年以上前、卒業研究のテーマに「カイコの病原ウイルス」を選びました。不勉強な私にとっては当時、カイコもウイルスも全く未知の領域であり、選んだ理由は指導教員から提案されたからでした。そして、その後40年以上もカイコあるいはウイルスに関わる研究に携わることになるのです。もし、別の指導教員から違うテーマを提案されていたら、違う道を進んでいたかもしれません。振り返れば、研究生活の大半30年を過ごした北海道大学においても“人”との出会いに大きな影響を受けたことが幾つもありました。不思議なことに、今思い出せばそれら一つ一つの出会いに感謝するばかりです。確かに、人が享受できる真の贅沢は、人間関係の贅沢なのかもしれません。これまでお世話になった皆様に、こころよりお礼を申し上げます。また、北海道大学がこれからも、多様な人々を包含し、人と人との出会いを通して、特に若い人たちが様々な可能性に気付く機会を提供できる素晴らしい大学であることを祈念いたします。

略 歴

昭和55年 3 月 京都工芸繊維大学繊維学部卒業
昭和57年 3 月 名古屋大学大学院農学研究科前期課程修了
昭和60年 4 月 日本学術振興会特別奨励研究員(昭和61年 3 月まで)
昭和61年 2 月 名古屋大学大学院農学研究科博士課程後期課程修了
昭和61年 2 月 農学博士(名古屋大学)
昭和61年 5 月 三重大学医学部助手
平成元年 6 月 三重大学医学部講師
平成 2 年 8 月 北海道大学農学部助教授
平成11年 4 月 北海道大学大学院農学研究科教授
平成18年 4 月 北海道大学大学院農学研究院教授

農学研究院教授

やなぎむら しゅんすけ
柳村 俊介 氏



北海道大学は私が勤務した3つ目の大学で、10年半在職しました。学部ゼミでのテキスト解釈をめぐるディスカッション、大学院生との調査研究や論文作成は、苦しい場面もありましたが、知的な充実感に浸ることができる時間でした。農学研究院の教職員の皆様からは多くのサポートをいただき、お陰様で職務を全うできたと、心底、感謝しています。

硬式庭球部の部長として現役選手やOBの皆さんと行動をともにしたことも忘れがたい思い出です。選手の試合に感動したことも屡々。OB諸氏の献身的活動を見るにつけ、身近に尊敬すべき人々が存在することを知りました。

専門分野に関して、北海道の農業関係者の方々と濃密な交流をする機会を与えられたことは実に貴重な経験でした。視野狭窄に陥りがちなところ、多くの方々から沢山のことを教わりました。

10年半、ありがとうございました。3月で北海道大学を離れますが、これからも在職中に得たご縁を大切にしたいと思います。皆様のご多幸とご活躍をお祈りします。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年 7 月29日生まれ
昭和53年 3 月 北海道大学農学部農業経済学科卒業
昭和55年 3 月 北海道大学大学院農学研究科農業経済学専攻修士課程修了
昭和59年 3 月 北海道大学大学院農学研究科農業経済学専攻博士課程単位修得退学
昭和60年 4 月 北海道大学農学部研究生
昭和61年 4 月 日本学術振興会 特別研究員(PD)
昭和62年 4 月 酪農学園大学酪農学部農業経済学科講師
平成 2 年 3 月 博士(農学)(北海道大学)
平成 4 年 4 月 酪農学園大学酪農学部農業経済学科助教授
平成11年 4 月 酪農学園大学酪農学部農業経済学科教授
平成17年 4 月 宮城大学食産業学部ファームビジネス学科教授
平成21年10月 北海道大学大学院農学研究院教授

教育学研究院教授

お ない とおる
小内 透 氏



1995年4月に10年半勤務した北海道教育大学旭川分校から出身研究室に異動し、以後25年にわたり北海道大学に勤務しました。この間、ロンドン大学での10ヶ月（2003年～2004年）の在外研究を除き、教育学研究院・教育学院・教育学部で教育社会学・地域社会学の研究と教育に従事してきました。「教育と不平等」や「地域社会類型」の個人研究を進めながら9人の大学教員を育て、彼らとの共同研究で地域社会学会賞（共同研究部門）を2011年（『トランスナショナルな移動と定住』）と2019年（『現代アイヌの生活と地域社会』）の2度にわたり、受賞することができました。

他方、役員補佐（6年）、教育研究評議員（7年）、教育学研究院・教育学院・教育学部長（4年）として大学運営に携わりました。とくに入試担当の役員補佐として総合入試制度を導入するのに膨大な時間を費やしました。数年に及ぶ議論の末、短期間で制度設計をするため連日会議を行ったのが記憶に残っています。部局長になって以降、大学をめぐる状況がきわめて深刻なものとなり、難しい部局運営を強いられました。その状況はさらに悪化していますが、大学が有為な人材を育てる場として機能し続けられるよう願っています。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年8月29日
昭和53年3月 北海道大学教育学部卒業
昭和56年3月 北海道大学大学院教育学研究科修士課程修了
昭和59年3月 北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程単位修得退学
平成9年3月 博士（教育学）（北海道大学）
昭和59年4月 日本学術振興会奨励研究員
昭和59年10月 北海道教育大学教育学部（旭川分校）助手
昭和61年10月 北海道教育大学教育学部（旭川分校）助教授
平成7年4月 北海道大学教育学部助教授
平成12年4月 北海道大学大学院教育学研究科助教授
平成14年7月 北海道大学大学院教育学研究科教授
平成19年4月 北海道大学大学院教育学研究院教授
平成19年4月 } 北海道大学役員補佐
平成25年3月 }
平成21年5月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
平成23年4月 }
平成21年5月 } 北海道大学大学院教育学研究院副研究院長
平成23年4月 }
平成25年4月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
平成30年3月 }
平成25年4月 } 北海道大学大学院教育学研究院副研究院長
平成26年3月 }
平成26年4月 } 北海道大学大学院教育学研究院長・教育学院長・教育学部長
平成30年3月 }

メディア・コミュニケーション
研究院教授

う さ み しんきち
宇佐見 森吉 氏



北海道大学に着任するまで北海道には一度も来たことがありませんでした。今から考えると北海道は遥か遠い国に思えて、東京から陸路札幌まで旅した日のことが思い出されます。

それから30年近く、その間時代は大きく変わり、大学自体もすっかり様変わりしました。私にとってはあつという間の出来事ではありましたが、その間暖かく見守って下さった北海道大学の諸先輩方、同僚、学生みなさんに深く感謝しています。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年5月11日
昭和55年3月 早稲田大学第一文学部露文学専攻 卒業
昭和59年3月 早稲田大学大学院文学研究科ロシア文学専攻博士課程（前期）修了
昭和63年3月 早稲田大学大学院文学研究科ロシア文学専攻博士後期課程 単位取得退学
昭和63年4月 } 早稲田大学第一・第二文学部助手
平成2年3月 }
平成4年11月 北海道大学言語文化学部学部助教授
平成16年4月 北海道大学言語文化部教授
平成19年4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授
平成23年4月 } 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院院長
平成27年3月 }
平成23年4月 } 北海道大学外国語教育センター長
平成25年3月 }
平成25年4月 } 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院長
平成27年3月 }

メディア・コミュニケーション
研究院教授

たけなか
竹中 のぞみ 氏

平成元年10月に北大に赴任し、30年と半年で定年を迎えることになりました。この間、北大は目まぐるしく変化し（教養部廃止、独法化等）、私が所属する部局も改組を経て、名称が変更しました。そんななか、ずっと変わらなかったのは、教養部、そしてその廃止後は全学教育で、初習外国語としてのフランス語を教えるという私の務めでした。毎年4月、フランス語を選択した文系から理系まで様々な専攻に進む新入生と初めて接する時、「今年の新入生はどんなかしら」とドキドキ感がありました。勉強熱心な学生たちにフランス語を教えられたことは、私にとって大きな喜びでした。私は1980年代に数年間フランスに留学し、ほとんどただ同然の学費で、フランス人学生と同様の特典を利用しながら、博士号を取得しました。北大生にフランス語を教えフランス文化の一端を伝えることにより、留学生にも極めて寛大だったフランスに、少しは恩返しができたのではないかと思います。最後に、これまで支えていただいた多くの先生方や職員の皆様に感謝を申し上げるとともに、北海道大学のさらなる発展をお祈りいたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年6月1日
昭和54年3月 上智大学外国語学部フランス語学科卒業
昭和56年3月 上智大学大学院文学研究科フランス文学専攻博士前期課程修了
昭和63年7月 ボルドー第三大学フランス文学比較文学専攻博士課程修了
昭和63年7月 フランス文学比較文学第三課程博士(ボルドー第三大学)
平成元年10月 北海道大学言語文化部助教授
平成17年4月 北海道大学言語文科学部教授
平成19年4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授

保健科学研究院教授

さいとう たけし
齋藤 健 氏



北海道大学薬学部を卒業後、環境科学研究科へ進学し、助手として医学部で採用されましたので、短期間で3つの学部研究科で学べる貴重な経験をしました。このこともあり、将来は研究者として全国規模で異動することを覚悟していましたが、実際にはそのようなことはなく、大学院保健科学研究院での教育研究生活を最後に、北海道大学で定年を迎えられるのは望外の喜びです。学生時代や留学を含めた新米の教員時代から、指導者、同僚に恵まれ、その環境で成長させていただいている中で、学生や院生にも恵まれました。思えば、大変幸運な教員生活であったと実感しています。

若い頃から生体の持つ防御機構や疾病の予防に興味があり、そのことが人々を取り巻く環境の健康影響やアンチエイジングなどの健康科学への興味へと繋がっています。長い研究生活を通じて変わらないテーマに興味を持ち、研究を続けてこられたのは、ひとえに北海道大学や保健科学研究院の持つキャパシティの大きさによるものと感謝しています。

文字通り私を育ててくれた北海道大学が、学生や教職員に希望と大志を抱かせる唯一無二の大学としてさらに発展し続けることを心から願っております。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年5月7日
昭和54年3月 北海道大学薬学部卒業
昭和56年3月 北海道大学大学院環境科学研究科修士課程修了
昭和57年3月 北海道大学大学院環境科学研究科博士後期課程退学
昭和62年9月 医学博士(北海道大学)
昭和57年4月 北海道大学医学部助手
昭和63年4月 } 英国オックスフォード大学ICL客員研究員
平成2年3月 }
平成6年9月 北海道大学医学部講師
平成9年8月 北海道大学医学部助教授
平成17年4月 北海道大学医学部教授
平成20年4月 北海道大学大学院保健科学研究院教授
平成22年4月 } 北海道大学環境健康科学研究教育センター副センター長
平成24年3月 }
平成24年4月 } 北海道大学大学院保健科学研究院副研究院長
平成26年3月 }
平成24年4月 } 北海道大学環境健康科学研究教育センター長
平成28年3月 }
平成28年4月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
令和2年3月 }
平成28年4月 } 北海道大学大学院保健科学研究院長・学院長
令和2年3月 }

保健科学研究院教授

やまもと とおる
山本 徹 氏

定年退職を迎えるにあたって、少年老い易く学成り難しの感がいたします。私は1975年に北大理類に入学し、当時は学生運動の余韻もあり入学式がなく教養部（現、高等教育推進機構）前に並べられた机に沿って入学手続きを済ませて学生生活がスタートしました。都ぞ弥生を5番まで漢字も間違えずに書けると合格との科目もあり、おおらかな時代でした。理学部物理学に進学し22歳で北海道を離れ、15年後に医学部保健学科の前身の3年制の医療技術短期大学部診療放射線技術学科に着任しました。その直前まで10年近く企業で医療機器の研究開発を行っており、着任後は放射線技師教育およびMRI撮像法などの研究を進めてきました。2003年に4年制の医学部保健学科となり、2008年には大学院も設置されて現在に至っております。自分の興味の赴くままに研究を進め、医療機器ユーザーのプロフェッショナルを目指す多くの学生達には苦労をかけたと思います。しかし、卒業時に「北大を卒業することに誇りを持てるか」と問いかけると全員が直ぐに手をあげ嬉しく思ったことがあります。これからもこのような北大に誇りを持てる学生を育てていただきたいと切に願います。ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和32年 2月13日
昭和54年 3月	北海道大学理学部卒業
昭和56年 3月	東京大学大学院工学系研究科修士課程修了
昭和59年 3月	東京大学大学院工学系研究科博士課程修了
昭和59年 3月	工学博士（東京大学）
昭和59年 4月	民間（旭化成工業株式会社）
平成 6年 1月	
平成 6年 2月	北海道大学医療技術短期大学部助教授
平成12年 4月	北海道大学医療技術短期大学部教授
平成15年10月	北海道大学医学部教授
平成20年 4月	北海道大学大学院保健科学研究院教授

工学研究院教授

すず き りょうすけ
鈴木 亮輔 氏

赴任時に継続して仕事をしたいと高額の費用をかけて北海道に運び込んだ装置類は、14年経ってさすがに使い物にならなくなり、更新をと悲鳴を上げています。東京から技術者を呼ぶと費用が高いからと、自前の修理を楽しみ、世界にないプロセスを！世界にない実験装置を！と学生諸君と創意工夫し改良してきました。比較的实验に専念できる環境を得て、長時間かかる高温材料化学の実験が存分にできたのは幸せでした。自らの下手な英語に情けない思いをしながらも、国際会議や著名な雑誌に論文発表するときは実に誇らしい気分です。研究者冥利に尽きました。北大で更に洗練したはずのチタン新製錬法のOS法は、発案から20年経ってもチタンの還元には未だ実用化されていません。なんとも非力を歯がゆく思っていました。イギリスでの酸化タンタルの還元や、核燃料サイクルでガラス固化処理体を解体するのに適用され、望外の応用に嬉しく思っています。自然界で最安定なスカンジウム酸化物の還元や、水レンズによる太陽熱集熱、二酸化炭素の電気分解などと、奇抜なアイデアを実践できたのは北大の開拓精神の御陰で有り、後進の皆様の一層の奮起を期待しています。

略 歴

生 年 月 日	昭和30年 8月 8日
昭和54年 3月	京都大学工学部卒業
昭和56年 3月	京都大学大学院工学研究科修士課程修了
昭和60年 7月	京都大学大学院工学研究科博士後期課程修了
昭和60年 7月	工学博士（京都大学）
昭和60年 3月	京都大学工学部助手
平成 5年11月	京都大学工学部助教授
平成 8年 4月	京都大学大学院工学研究科助教授
平成 8年 5月	京都大学大学院エネルギー科学研究科助教授
平成18年 3月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4月	北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

せん ぶ おさむ
千歩 修 氏



私の北海道大学学生生活は、昭和51年からの6年間であった。生協食堂の定食が、サービスランチ150円、カレー200円、エルム250円だったように思う。北海道大学の授業等で最も有用だったものは、卒業論文・修士論文であった。最初はよくわからずに実験等を行っていたが、データ整理・考察を進めるうちに研究の面白さがわかるようになった。気が付けば、電子計算機を使えるようになり、文章の書き方や考え方までも学び、自己の成長を感じた。

修士修了後は、建設省営繕で実務を経験し、建設省建築研究所で研究の幅を広げ、平成3年から北海道大学の教員となることができた。教育・研究の一番の目的は、私が学生時代に感じた卒論等を通した自己の成長を学生に経験させることである。これまで、建築（授業・実務・研究）を「穴を掘ること」に例えて説明してきた。授業は建築という広い範囲の表面をなでる程度のもの、実務はある程度の範囲をある程度の深さまで掘るもの、研究（卒業論文等）はごく狭い範囲をできるだけ深く掘るもの。一度、深い穴を掘った経験があれば、次に穴を掘る時、それ以上に深い穴が掘れる。だんだん深い穴を掘れるようになる学生をみるのは、喜びであった。皆様のご活躍をお祈りする。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年 8月19日
昭和55年 3月	北海道大学工学部卒業
昭和57年 3月	北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
平成2年 3月	工学博士（北海道大学）
昭和57年 4月	東北地方建設局建設技官
昭和59年 4月	建築研究所研究員
平成2年 4月	建築研究所主任研究員
平成3年 4月	北海道大学工学部講師
平成4年 4月	北海道大学工学部助教授
平成9年 4月	北海道大学大学院工学研究科助教授
平成15年 4月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4月	北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

たか き むつみ
高木 睦 氏



【アカデミアによる工学研究】

『大学卒業後は人の役に立ちたい』と願っていた高校生の私は、『産業に直結した技術を学べる』と聞いた工学部に入学しました。卒業し、『やっと世の中の役に立てる』と喜んで、ある総合化学会社を13年間で一仕事終えて退職し、大学（工学部）の教員になりました。この間、工学は（狭義には）サイエンスを応用して有用な材料を創製したり、大規模に物品を生産するための方法を研究する学問であると思ってきました。ですから、講義や研究指導では『サイエンスも大事だが、ここではエンジニアリングをやりましょう』と学生達に宣言したり、『エンジニアリング（工学）は研究結果の実用化、事業化、社会実装を目指すことが前提ですから、実用化までのしっかりした（仮説を含む）道筋、すなわちロジックが大事ですよ』と説明するよう心掛けてきました。しかし、学会等で『アカデミアの工学研究』を見ていますと、たまにですがロジックはあるが具体性が弱く『実用化は難しい』と感じる発表もあります。『特許出願や企業からの奨学金が実用化の十分条件との思いこみ』が一の研究者にあると感じることもあります。

このような点で自己点検しつつ研究を続けさせて戴き、大小数件の実用化、製品化の役に立てたことは、望外の喜びであり、自由な北海道大学の雰囲気のお蔭と感謝申し上げますとともに、北海道大学の更なる発展を祈念申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年11月13日
昭和54年 3月	大阪大学工学部卒業
昭和56年 3月	大阪大学大学院工学研究科博士前期課程修了
平成6年 8月	工学博士（大阪大学）
昭和56年 4月	民間（旭化成工業株式会社）
平成6年 3月	
平成6年 4月	大阪大学工学部附属生物工学国際交流センター助手
平成7年 4月	大阪大学生物工学国際交流センター助手
平成10年 9月	大阪大学生物工学国際交流センター助教授
平成16年 4月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4月	北海道大学大学院工学研究院教授
平成24年 4月	北海道大学大学院工学研究院副研究院長
平成26年 3月	

工学研究院教授

にしぐち のりひこ
西口 規彦 氏

昭和58年に本学工学研究科応用物理学専攻を修了し、民間企業や私立大学での職を経て、昭和62年に工学部の助手として採用されました。以来、33年もの間好きな物理の研究に没頭し、充実した日々でした。また、海外で研究する機会を得ることが出来、様々な経験を積むことが出来ました。北大のような恵まれた環境で学生生活と教員生活を送られたことを大変幸せに感じております。

教育・研究以外では総長補佐を5年間つとめ、大学の運営の一端、おもに広報に携わりました。広報誌の編纂、ホームカミングデー開催、各地の同窓会への参加などを通じ多くの同窓生の活躍を見る機会を得、自分が卒業生の一人である事を誇りに思えました。また、本学の校友会エラムの設立に際し、委員長の一人として、規程の整備、イベントの企画・開催などに携わりました。新しい組織の滑り出しに少しは役立てたかと思えます。

特任教員としてさらに1年間、未解決の研究課題に精を出すとともに、引き続き大学の発展と学生の指導および支援に尽くしていきたいと思えます。

これまで多くの先輩や同僚教員、事務の方々に色々とお世話になりました。心より感謝申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年 1月25日
昭和53年 3月	北海道大学工学部卒業
昭和55年 3月	北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
昭和58年 3月	北海道大学大学院工学研究科博士後期課程修了
昭和58年 3月	工学博士（北海道大学）
昭和58年 4月	} 民間（富士通研究所）
昭和59年 2月	
昭和59年 4月	北海道工業大学教養部講師
昭和62年 4月	北海道工業大学教養部助教授
昭和62年 6月	北海道大学工学部助手
平成 5年 8月	北海道大学工学部講師
平成 7年 7月	北海道大学工学部助教授
平成 9年 4月	北海道大学大学院工学研究科助教授
平成19年 4月	北海道大学大学院工学研究科准教授
平成20年11月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4月	北海道大学大学院工学研究院教授
平成24年 4月	} 北海道大学役員補佐
平成26年 3月	
平成26年 4月	} 北海道大学総長補佐
平成29年 3月	

工学研究院教授

は やま ひろふみ
羽山 広文 氏

建築環境学研究室では1997年に荒谷登先生が定年ご退官後、繪内正道先生が教授に昇任されました。私はこれまで大学での教育・研究の経験がなく大変不安でしたが、1998年、18年間勤務したNTTファシリティーズを退職し、建築環境学研究室へ着任しました。当時、大学では大学院重点化により、土木、建築、衛生、資源がシャッフルされており、建築環境学研究室は、都市環境工学専攻人間環境計画学講座に属していました。その後、2005年に再度の組織変更があり、空間性能システム部門に改組したものの、旧衛生工学科の環境システム工学研究室、環境人間工学研究室とは共通の研究分野であることから、互いに刺激し合い、助け合い、充実した研究・教育活動に取り組めたことは幸いでした。2009年に繪内正道教授が定年ご退職された後、菊田弘輝助教（2018年から環境空間デザイン学研究室准教授）と共に研究室を担うことになり、さらに、2011年からは森太郎准教授も加わり、さらに本学施設担当の役員補佐・総長補佐も務めさせて頂きました。北海道大学での在職22年間、建築環境学研究室からは卒業生108名、修士課程修了生97名、博士課程修了生（含む論文博士）17名を数えます。建築都市コースをはじめ多くの教職員、学生、社会人大学院生に支えられましたことに深く感謝申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和30年 8月30日
昭和53年 3月	北海道大学工学部卒業
昭和55年 3月	北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
平成 9年 3月	博士（工学）（北海道大学）
昭和55年 4月	} 民間（日本電信電話公社）（日本電信電話株式会社） （株式会社エヌ・ティ・ティ・ファシリティーズ）
平成10年 3月	
平成10年 4月	北海道大学大学院工学研究科助教授
平成19年 4月	北海道大学大学院工学研究科准教授
平成21年 7月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4月	北海道大学大学院工学研究院教授
平成22年 4月	} 北海道大学役員補佐
平成26年 3月	
平成26年 4月	} 北海道大学総長補佐
平成29年 3月	

工学研究院教授

ますだ たかお 氏
増田 隆夫 氏



岐阜の片田舎にある専業農家の末っ子に生まれて、大学に入るまでは家族で旅行をした記憶も無く、複雑系としての土を相手にする暮らしが自分の全てでした。その後、京都に移動して、目の前の環境が大きく変化しました。慣れ親しんだ土からは大きく離れた単純化された反応場（例えば、温度や圧力が制御された反応容器）を相手に物質変換に関する研究をしていました。その後、現在の北海道大学に移動し、昔慣れ親しんだ土を身近に感じました。本学に赴任してからは単純化された反応場を利用して得た知識を活用し、複雑系である実フィールドの研究を進めることを意識してきました。現在は、大学機能強化促進経費の支援を受けて、昨年度から主に工学研究院、農学研究院、水産科学研究院が連携して立ち上がったロバスト農林水産工学国際研究教育拠点の拠点長を拝命し、関係する教職員の理解と協力を得て、複雑系である農林水産業に生産工学の概念を付与した実学の推進に携わらせていただいています。多くの方の成果により、これら実学の発進拠点として本学が世界を牽引することを願うとともに、将来、厳しい農業に従事した幼少期時代からは想像もできない姿に農業が変貌してゆくことを夢見ています。

最後になりましたが、私を受け入れていただいた北海道大学、そして関係していただいた諸先輩、研究室のスタッフと学生に感謝いたします。

略 歴

生 年 月 日	昭和32年 1 月11日
昭和54年 3 月	京都大学工学部卒業
昭和56年 3 月	京都大学大学院工学研究科修士課程修了
昭和57年10月	京都大学大学院工学研究科博士後期課程中退
昭和63年 7 月	工学博士（京都大学）
昭和57年10月	京都大学工学部助手
平成元年 4 月	京都大学工学部講師
平成 6 年 2 月	京都大学工学部助教授
平成 8 年 4 月	京都大学大学院工学研究科助教授
平成13年 4 月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4 月	北海道大学大学院工学研究院教授
平成24年 4 月	北海道大学大学院総合化学院副学院長
平成26年 3 月	
平成26年 4 月	北海道大学大学院工学研究院副研究院長
平成29年 3 月	
平成29年 4 月	北海道大学大学院工学研究院院長・工学部長
平成31年 3 月	

工学研究院教授

やました としひこ 氏
山下 俊彦 氏



昭和60年 5 月に赴任して以来、約35年間北海道大学にお世話になりました。この間、緑豊かで美しいキャンパスと素晴らしい自然に囲まれた札幌・北海道で過ごすことができ、研究面、生活面でかけがえのないものとなりました。

沿岸海域は近年災害が多発している一方で、豊かな生態系・漁業生産も得られる場所です。私は、沿岸域の減災・環境保全を目指して、特に、陸域からの流出物質の影響を考慮した土砂災害（海岸侵食や港内堆砂等）と水産有用生物（海藻や二枚貝等）の生息環境保全の研究に取り組みました。漂砂・生物問題を研究する際には共に、論理的取組だけでは解決できず、現地観測・調査による現象解明等の発見的アプローチがどうしても必要でした。北海道では、魅力的な研究テーマが身近にあり、かつ、多くの方々から共同研究等でご支援いただいて、充実した研究生生活を送ることができました。その成果が、特に寒冷地である北海道沿岸の減災・環境保全に多少なりとも貢献できたとすれば、望外の幸です。

最後になりましたが、本学でお世話になりました多くの教職員の皆様に心から感謝申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年 6 月15日
昭和54年 3 月	東京工業大学工学部卒業
昭和56年 3 月	東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了
昭和60年 2 月	工学博士（東京工業大学）
昭和56年 4 月	東京工業大学工学部助手
昭和60年 5 月	北海道大学工学部助教授
平成 9 年 4 月	北海道大学大学院工学研究科助教授
平成17年 4 月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4 月	北海道大学大学院工学研究院教授
平成25年 4 月	北海道大学大学院公共政策学連携研究部教授
平成27年 4 月	北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

よこた ひろし
横田 弘 氏

昭和55年に大学院を修了し、主に国の研究機関において社会インフラの設計および維持管理に関する研究等に従事してきました。そして平成21年4月に本学教授を拝命し、11年間に亘り恵まれた教育研究環境と美しいキャンパスにおいて豊かな日々を過ごすことができました。北海道で暮らすのは初めての経験で雪が降ると心が躍ったものです。同時に清々しい空気に満ち、自然あふれる北の大地の美しさに深く感動しました。しかしこの11年で明らかに環境が変わってきました。自然の驚異が増し、多くの自然災害にも見舞われるようになりました。今まさに感染症の脅威にも遭遇しています。このように優れた社会インフラに支えられて豊かであると思っていた社会が、非常に脆弱で心もとない砂上の楼閣であることが明らかになりつつあります。そのような中で、明るい未来像を描きレジリエントな社会を築くためには、それぞれの立場で知恵を出し合うことが求められています。北大には、このような力を秘めた若者をこれからも多く輩出して欲しいと思っています。

末筆になりましたが、これまで支えていただいた教職員の皆様と研究で苦楽を共にしてくれた学生諸君に深く感謝いたします。

略 歴

生 年 月 日	昭和30年9月13日
昭和53年3月	東京工業大学工学部土木工学科卒業
昭和55年3月	東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了
平成5年2月	博士（工学）（東京工業大学）
昭和55年4月	運輸省港湾技術研究所研究官
昭和61年4月	運輸省港湾技術研究所主任研究官
平成2年4月	運輸省第二港湾建設局横浜調査設計事務所次長
平成4年4月	運輸省港湾技術研究所設計技術研究室長
平成9年8月	運輸省港湾技術研究所構造強度研究室長
平成13年4月	港湾空港技術研究所構造強度研究室長
平成17年4月	港湾空港技術研究所LCM研究センター長
平成18年4月	港湾空港技術研究所研究主監
平成21年4月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年4月	北海道大学大学院工学研究院教授

経済学研究院教授

いた や じゅんいち
板谷 淳一 氏

平成10年に小樽商科大学より赴任して以来、22年間北大に奉職させていただきました。北大は学部および大学院を過ごした母校なので、そこでポジションを得るという幸運に恵まれたことに大変感謝しています。私の専門である公共経済学という分野は、公共財供給のあり方、税制の変更が経済活動に及ぼす影響、租税競争などの政策志向的な研究を行ってきましたが、抽象的かつ理論研究が中心であったため、研究成果の社会への発信や還元が十分できたかどうかは甚だ心許ないものです。他方、多くの博士課程の学生に恵まれ、彼らを研究者として送り出したことは幸運でした。今後、大学間の学生獲得競争、論文の生産競争、研究資金獲得競争などの激化により、大学も研究者も厳しい生存競争に直面することになります。しかし「結果を出した」人材や大学しか生き残れないという未来像は必ずしも望ましいものではないように思われます。公共経済学では競争こそが最大限の効率性をもたらすというアダム・スミス以来の経済学の主流の考え方に立脚していますが、大学の教育や研究のような外部性が存在する場合は、適切な政府介入や細心の市場メカニズムのデザインが必要であることを示唆しています。生物の多様性は重要であると叫ばれていますが、大学のあり方を決める上でも競争プラス多様性を保つことが重要であると考えます。さまざまなタイプの研究者、教育者、大学が存在してこそ、革新的な研究や多様な人材を生み出せるのではないかと考えます。北大の学生も本州の学生に比べてのんびりしていると言われますが、自由でかつ伸び伸びとした環境で研究や教育ができる点が北大の大きな強みであり、このような雰囲気は末永く維持されて、多様な学生や研究者が巣立っていくことを祈っています。

略 歴

生 年 月 日	昭和30年5月29日
昭和53年3月	北海道大学経済学部経済学科卒業
昭和59年3月	北海道大学大学院経済学研究科経済学専攻修士課程修了
昭和59年3月	北海道大学大学院経済学研究科経済学専攻博士後期課程単位修得退学
昭和59年4月	北海道大学経済学部助手
昭和61年4月	小樽商科大学商学部講師
昭和62年10月	小樽商科大学商学部助教授
平成2年5月	Ph.D (Economics) (米国ロチェスター大学)
平成8年10月	小樽商科大学商学部教授
平成10年10月	北海道大学大学院経済学研究科教授
平成26年4月	北海道大学大学院公共政策学連携研究部教授
平成28年4月	北海道大学大学院経済学研究科教授
平成29年4月	北海道大学大学院経済学研究院教授
令和2年3月	退職
平成2年4月	北海道大学大学院経済学研究院特任教授(予定)

歯学研究院教授

てい かんちゅう
鄭 漢忠 氏



北の大地に憧れて大阪から北海道大学に入学しました。当時の教養の雰囲気あまりに素晴らしく、4年間みっちり教養を積みました。

大学卒業後も北大に残り、無給医時代から始まり、その後教員として学生・大学院生の指導と研究、そして患者の治療をこの北大でどうにかこうにか続けてこられたことにホッとしています。まだ油断大敵。また、教員として、臨床医としてここまでこられましたのもひとえにご指導を賜った多くの先輩また関連職種の方々のおかげと心より感謝申し上げます。教員生活の後半ではいろんなハラスメント問題がクローズアップされてきて、時にはそのことに時間も取られましたが、結局は人と人との関係だということに改めて教わりました。

北大も生き残りをかけて次々と新しい戦略を出していますが、あまりに難しく理解できないことが増えました。私自身は特任としてあと一年ありますので、上手に次の世代にバトンタッチして去りたいと思います。最後になりますが、北大の多くの先生方が再びゆったりとご自身のお仕事に専念できる日が来ることを祈念します。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年7月17日
昭和57年3月 北海道大学歯学部歯学科卒業
昭和60年4月 北海道大学歯学部附属病院助手
昭和62年1月 北海道大学歯学部助手
平成4年9月 博士（歯学）（北海道大学）
平成11年7月 北海道大学歯学部附属病院講師
平成15年10月 北海道大学医学部・歯学部附属病院講師
平成16年4月 北海道大学病院講師
平成16年7月 北海道大学大学院歯学研究科助教授
平成19年4月 北海道大学大学院歯学研究科准教授
平成24年4月 北海道大学大学院歯学研究科教授
平成29年4月 北海道大学大学院歯学研究院教授

文学研究院教授

いけ だ しょうじゅ
池田 証壽 氏



退職にあたり、北大とともに過ごした時間を振り返ってみた。昭和49年4月に北大文類に入学。以来、11年間にわたり学部生・大学院生として在籍。幸い文学部助手として採用され2年半勤務。当時は、国語学講座と国文学講座の二講座で、国語学国文学研究室を維持していた。国語学講座は石塚晴通教授、国文学講座は亀井秀雄教授、身崎壽助教授が担当されていた。助手在任中、豊島正之助教授が着任され、コンピュータを駆使した研究手法に多に啓発された。その後、信州大学に転じて、10年10ヶ月を過ごした。上司の馬瀬良雄教授には乏しい研究室予算の中、コンピュータの導入をお認めいただいた。とはいえ、春から秋まではテニス、冬はスキーでもっぱら体力の維持・向上をはかった。豊島助教授のお誘いでJIS漢字規格の改訂・開発に関わった。1997年夏に、北大に戻り、退職する本年3月まで22年8ヶ月の期間をこのエルムのキャンパスで過ごした。助教授としては、石塚教授の推進する漢字字体研究に参画して、国内では高山寺や京都国立博物館、海外では大英図書館やフランス国立図書館を訪問して漢文古写本の原本調査を実施して成果を出した。教授となってからは、日本古辞書のデータベース化に本格的に取り組み、完成・公開までの道筋をつけることができた。

北大にはすっかりお世話になりました。ありがとうございます。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年10月29日
昭和54年3月 北海道大学文学部文学科卒業
昭和56年3月 北海道大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了
昭和56年3月 文学修士（北海道大学）
昭和60年3月 北海道大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程退学
昭和60年4月 北海道大学文学部助手
昭和62年10月 信州大学人文学部助教授
平成9年8月 北海道大学文学部助教授
平成12年4月 北海道大学大学院文学研究科助教授
平成17年1月 北海道大学大学院文学研究科教授
平成31年4月 北海道大学大学院文学研究院教授

文学研究院教授

きたむら きよひこ
北村 清彦 氏



私は学生時代、なるべく現実世界と関わらないことを学びたいと思って「美学」を専門としましたが、それはいかにも浅はかな考えでした。美学は美や芸術あるいは感性の領域を研究対象とする哲学の一部門です。しかしこうした規定に既に美学の困難さが潜んでいます。すなわち美学は一方で、学問として概念を論理的に扱う知性の営みです。他方、概念によらず直観によって世界を認識する感性の営みです。美学はこの両方に関わり、いわば「知性の感性化」あるいは「感性の知性化」という課題に立ち向かわなければなりません。ところが芸術はこの困難な課題を易々と乗り越えてしまうのです。

かつての私がそうであったように、とすると芸術は「人の生死に直接関わることはない」とか「別になくても日々の生活に困ることはない」などと言われたりもします。しかし決してそうではありません。水や空気がなければ人は生きられないのと同様、芸術がなければ人は生きられません。というより、人とは芸術を作り出すことで、この地球環境に適応し生存することのできた生物種なのです。現実世界と関わらないどころか、私たちは芸術によって生かされているのです。このことを考究するのが私の美学のすべてです。

縁あって北海道大学で美学の研究教育に従事できたのは誠に幸せなことでした。その仕事を全うしえたかどうか忸怩たる思いはありますが、芸術学講座の新設や北海道芸術学会の創設、また全国で活躍する数多くの学芸員を輩出したことなどが評価され、私などには身に余る「札幌芸術賞」を受賞したことも望外の喜びでした。これも優秀な同僚、有能な職員、有望な学生諸君のお陰であり、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年 8 月14日
昭和54年 3 月 京都大学文学部哲学科卒業
昭和56年 3 月 京都大学大学院文学研究科修士課程美学美術史学専攻修了
昭和56年 3 月 文学修士（京都大学）
昭和60年 3 月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学
昭和60年 4 月 京都大学文学部助手
昭和62年10月 島根大学法文学部助教授
平成 8 年10月 北海道大学文学部助教授
平成12年 1 月 論文博士（文学）（京都大学）
平成12年 4 月 北海道大学大学院文学研究科教授
平成31年 4 月 北海道大学大学院文学研究院教授

情報科学研究院教授

かね こ しゅんいち
金子 俊一 氏

前職の東京農工大学における16年を含めて、40年を超える長い期間にわたり、技術人材育成のための教育研究に従事してまいりました。天職と感じて務めてきましたが、当人は強い満足を感じています。重点化、独立法人化、新しい情報科学研究科の設立などの組織改革においては、常に学生たちからの視点を忘れずに、それらの運営に参加してまいった積りでおります。研究分野としては一貫して画像パタン計測、特にロバスト画像照合の研究において、多くの学部生および大学院生、特に多くの博士後期課程学生のための研究指導に努めてまいりました。すべては在校生および卒業生たちの評価を待つ以外にないわけですが、卒業生の多くが継続して同分野において活躍していることは、この身の幸せであります。今後ともできる限りにおいて、この技術分野における技術指導などに従事してまいる覚悟でおります。北海道大学工学部および情報科学研究院・学院のますますの発展を祈ります。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年 7 月13日
昭和53年 3 月 北海道大学工学部精密工学科卒業
昭和55年 3 月 北海道大学大学院工学研究科情報工学専攻修士課程修了
昭和55年 4 月 東京農工大学工学部助手
平成 2 年 5 月 工学博士（東京大学）
平成 3 年 7 月 東京農工大学工学部助教授
平成 8 年 4 月 北海道大学工学部助教授
平成16年 4 月 北海道大学大学院情報科学研究科教授
平成31年 4 月 北海道大学大学院情報科学研究院教授

情報科学研究院教授

ツォイクマン トーマス 氏
ZEUGMANN THOMAS 氏



北海道大学のキャンパスは、私がこれまで見てきた大学の中でどこよりも美しいキャンパスです。

しかしながら、2004年私が着任して以来この16年間に、この自然豊かな美しいキャンパスが少しずつ変化していることに気づきました。毎日徒歩でオフィスまでのわずか10分間ですが、四季の変化、生き物達の様々な変化に出会い、気づきをもらえます。

私は退職後も、この美しいキャンパス内の散歩を楽しみたいと思っています。

これからも、この美しいキャンパス、美しい自然を絶やすことなく、守って行って欲しいと願ってやみません。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年1月7日
昭和56年 8 月	フンボルト大学数学科卒業
昭和58年 8 月	フンボルト大学大学院数学科博士課程修了
昭和58年 9 月	フンボルト大学数学科助手
昭和58年10月	理学博士 (Dr.rer.nat.) (フンボルト大学)
平成 3 年 5 月	ダルムシュタット工科大学情報科学科助教授
平成 6 年 4 月	九州大学理学部助教授
平成 9 年10月	九州大学大学院システム情報科学研究科教授
平成12年 4 月	リューベック大学教授
平成16年 4 月	北海道大学大学院情報科学研究科教授
平成31年 4 月	北海道大学大学院情報科学研究院教授

電子科学研究所附属グリーンナノテクノロジー研究センター教授

み さ わ ひろあき
三澤 弘明 氏



2003年に徳島大学より本学へ着任し、本年度無事に定年を迎えることができました。この間、本学のナノテク関連大型装置の整備のために、文科省のナノテクネットワーク事業、それに続くナノテクプラットフォーム事業へ参画し、電子線描画装置3台や当時北海道地域には導入されていなかった収差補正機能付き高分解能走査型透過電子顕微鏡2台、超高速時間分解・空間分解光電子顕微鏡、等々の先端装置の導入を実現し、学内外の多くの研究者・学生の方々に共同利用して頂ける状況を作れたことを大変嬉しく思っています。また、研究者個人としては、前任地で始めた科学技術振興機構CRESTの研究を本学において継続・終了し、本学では、科研費の特定領域研究（領域代表）、基盤研究（S）と（A）、そして特別推進研究、と連続して申請研究を採択して頂き、プラズモンの化学に関する研究を力強く推進することができました。これもひとえに優れた研究者の仲間や学生、そして事務職員の方々のお陰と感謝いたしております。本当にありがとうございます。特別推進研究はあと3年間残っており、電子科学研究所において継続いたしますので、引き続きどうぞ宜しくお願いいたします。

略 歴

生 年 月 日	昭和30年11月10日
昭和54年 3 月	東京都立大学工学部卒業
昭和56年 3 月	筑波大学大学院理工学研究科修士課程修了
昭和59年 7 月	筑波大学大学院化学研究科博士課程修了/理学博士(筑波大学)
昭和59年 4 月	米国テキサス州立大学ダラス校博士研究員
昭和62年 7 月	筑波大学化学系助手
昭和63年12月	新技術開発事業団グループリーダー研究員
平成 5 年 4 月	徳島大学工学部助教授
平成 7 年11月	徳島大学工学部教授
平成 9 年 4 月	徳島大学大学院工学研究科教授
平成15年 5 月	北海道大学電子科学研究所教授
平成18年 4 月	北海道大学電子科学研究所附属ナノテクノロジー研究センター長
平成21年10月	
平成21年10月	北海道大学教育研究評議会評議員
平成25年 9 月	
平成21年10月	電子科学研究所長
平成25年 9 月	
平成24年 4 月	北海道大学電子科学研究所附属グリーンナノテクノロジー研究センター教授
平成31年 4 月	北海道大学ディスティングイッシュトプロフェッサー

量子集積エレクトロニクス
研究センター教授はしづめ
橋詰 保 氏

自分の成長を実感しないまま、月日の経つのは早いもので、この原稿を書く時期になってしまいました。工学部電気工学科から北大勤務がスタートし、1998年に現センターに配置換えになり、以降22年間にわたり、半導体デバイスの研究を継続することができました。熱心な学生と一緒に実験データの解釈に苦心し、学会発表や論文執筆につながる時が最も充実感を覚えました（学生の感じ方はかなり違うかも知れません）。そして、学生が卒業・就職し、リクルーターとして元気な顔を見せてくれることが、何よりの幸せでした。

40歳代後半から50歳代中盤では、やれ外部資金、それ研究業績と、何か追い立てられるように活動した感がありますが、仕事をする上では、このような時期も必然かと思うこともありました。ちょうどその頃に主たるターゲットとした半導体材料（窒化ガリウム）が縁で、大学および企業研究所の研究者と多くの交流を行うことができ、大いに刺激を受けたことを時々思い出します。4月からは特任教授として勤務しますが、絞った研究を行うこと、そして、自分の経験値を多少なりとも大学院生や中堅の先生方に移行することを目標にしたいと考えています。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年 6月30日
昭和56年 3月	北海道大学工学部電気工学科卒業
昭和56年 4月	釧路工業高等専門学校電子工学科助手
昭和62年 4月	北海道職業訓練短期大学校教導
平成 3年 3月	工学博士（北海道大学）
平成 4年 4月	北海道職業訓練短期大学校講師
平成 6年 7月	北海道大学工学部助教授
平成10年 4月	北海道大学量子界面エレクトロニクス研究センター助教授
平成16年 4月	北海道大学量子集積エレクトロニクス研究センター教授
平成26年 4月	北海道大学大学院量子集積エレクトロニクス研究センター長
令和 2年 3月	
平成28年 4月	～名古屋大学未来材料システム研究所教授（クロスアポイントメント制度）

北方生物圏フィールド科学
センター教授あら き
荒木 肇 氏

平成15年から北方生物圏フィールド科学センターに勤務した。学生組織を持たない部局とはいえ、主査を務めた博士學位論文8編は大学院大学としては少ないだろう。博士学生2名が留年となり、4月異動後も指導を継続する。ラーニングサテライト、海外大学との連携協定、国内外の研究者招聘、全学科目等にも関わることができ、御礼申し上げます。

今年も総長不在の卒業式・入学式のようなものである。国立大学法人評価書に「学長のリーダーシップの下での組織・業務運営体制となっていない」と記述されていた。総長選考会議が文科省に総長解任申出をした理由は開示されない。教職員学生は不思議に思うが、教授会議での議論は少ない。よいのだろうか？

教員は専門分野でdeep discussionを学生に求める。実験や調査結果に関する討論は適切な考察のためのよいトレーニングである。専門は議論するが、大学（職場や制度等）のことは議論しない。これで学生が育つであろうか？大学や教職員の姿勢は学生の社会性や考え方の醸成に影響する。真剣に社会のことを考えれば、学生も反応するだろう。教職員が権威主義や競争主義に陥らず、人として教育や社会を考える大学であってほしい。Boys be human beings.

略 歴

生 年 月 日	昭和30年10月20日
昭和53年 3月	北海道大学農学部農学科卒業
昭和55年 3月	北海道大学大学院農学研究科農学専攻修士課程修了
昭和60年 3月	北海道大学大学院農学研究科農学専攻博士後期課程修了
同	農学博士（北海道大学）
昭和60年 4月	北海道大学農学部研究生
昭和60年10月	
昭和60年11月	北海道大学農学部助手
平成 3年 5月	新潟大学農学部附属農場助教授
平成13年 4月	新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター助教授
平成15年 4月	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教授

高等教育推進機構（理学院自然
史科学専攻専攻科学コミュニ
ケーション講座）教授

すずき まこと
鈴木 誠 氏



恵まれた環境の中で20年間仕事をする事ができた。教育では学生に恵まれた。大学院の授業では議論が尽きず、夜場所を変えて教育を語ったこともある。所属の院生たちは大変優秀で、それぞれ赴任先で力を発揮している。一般教育演習の「蛙学への招待」では、「解」のない究極の学びと称して20年間学生に厳しく接してきた。よく学生はついてきたと思う。学生や院生を通して、私は大学教員として成長できた。研究ではスタッフや研究費に恵まれた。近年は「コンピテンス基盤型科学教育の創造」をテーマに、基盤BとAを繋いで研究を進めたが、その成果の一部はこれからの理科教育の資質・能力議論のベースとなり、道半ばではあるが業務である北大の入試改革に結実しつつある。

クラーク博士の建学の理念を意識して走ってきた。それを可能としたのは、北大の素晴らしい環境と数多くの先生方、そして学生との出会いだった。心から感謝したい。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年 2月27日
昭和54年 3月	明治大学農学部農学科卒業
昭和54年 4月	協和発酵工業株式会社
昭和56年 4月	千葉県市原市立中学校教諭（数学）
昭和60年 4月	千葉県立高等学校教諭（生物）
平成 4年 3月	上越教育大学大学院学校教育研究科（修士課程）教科・領域教育専攻修了
平成12年 6月	北海道大学高等教育機能開発総合センター助教授
平成13年 3月	学校教育学博士（兵庫教育大学連合大学院）
平成15年 4月	北海道大学高等教育機能開発総合センター教授
平成17年 4月	北海道大学大学院理学院自然科学専攻科学コミュニケーション講座教授
平成22年10月	北海道大学高等教育推進機構教授

地球環境科学研究院准教授

くらさき まさあき
藏崎 正明 氏



生まれ育った兵庫県から、昭和50年に北大理類に入学して以来、途中、内地研究員として京都大学医学部と文部省（当時）の在外研究員（若手）としてチューリッヒ大学医理学部にいた計3年余りを除いて、ずっと札幌に住むことになるとは思っていませんでした。幸いにして大学院環境科学研究科に採用して頂いて以来、環境毒性学および環境生理学の研究に関わって来られたのは幸せなことだと思います。ことに、多くの学生、それも最後の10数年には、多くの外国人の学生と研究ができたのは楽しい思い出となっています。修了生を思い出すと、もちろん日本人が多いのですが中国、フィリピン、インドネシア、バングラデシュ、ベトナム、エクアドル、南アフリカおよびナイジェリアからの留学生を研究室に迎えることができたのは大きな喜びでした。幸いにしてこれまでに、12名の博士と50名の修士（助教時代の指導教員であった学生を含みます）を送り出すことができたのはささやかな北海道大学に対する貢献になったのではないかと考えています。幸い、後1年、特任の教員として残ることを許されましたので、やり残したポリフェノールの二面性の機構の解明と、まだ研究室に残っている5名の修士課程と5名の博士課程の学生を無事修了させることを最大の目標として頑張らなければと思っておりま。長い間、支えていただきました研究院の教員・職員の皆様に心から感謝いたしております。

略 歴

生 年 月 日	昭和30年 6月 5日
昭和54年 3月	北海道大学理学部卒業
昭和58年 3月	北海道大学大学院環境科学研究科博士後期課程中退
平成 5年 3月	博士（環境科学）（北海道大学）
昭和58年 4月	北海道大学大学院環境科学研究科助手
平成 5年 4月	北海道大学大学院地球環境科学研究科助手
平成17年 4月	北海道大学大学院地球環境科学院助手
平成19年 4月	北海道大学大学院地球環境科学研究院助教
平成27年10月	北海道大学大学院地球環境科学研究院准教授

地球環境科学研究院准教授

やまぎ きんいち
山崎 健一 氏



とび抜けて優秀でもなかった少年の私が、アルバイト収入と奨学金だけを頼りに、なんとか大学で学位をとり同時に助手の職を得られたのは「上出来」としか言いようがありません。そんな私に名大やロックフェラー大学での研究の機会や、北大で助教授の職を与えてくださった皆様方には感謝の言葉しか浮かびません。大学教師になって35年間、私より遥かに優秀な50名の学部生・大学院生諸君が私と共に研究に取り組んでくれたこと、約100名の北大生が生物ロボットコンテスト世界大会に私と共に挑戦してMITについて来てくれた事、45名の北大生が私の創った会社にて小学生の理科実験教育を手伝ってくれた事、どれをとっても私の生涯の誇りです。昨日まで二十歳だと思っていた私も、聞けばもう「63歳となり定年退職ですよ」との事、ただただ驚くばかりです。五木寛之先生の書かれた「百歳人生を生きるヒント」によれば、60歳代は「群れから抜け出て一人で孤独に生き、死と共に自らを手放すまでのリセットの時期」との事、若い頃から群れを嫌い、雑音に惑わされることを拒否して生きて来た私にとっては、同志を得た気分でした。北大での残された特任准教授としての2年間、学生はとらないことにしました。120歳になるまでの「一人でなんでもこなせる高齢者になるための秒読み」が、ついに始まった。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年
昭和60年 3月 大阪大学大学院医学研究科博士課程修了
昭和60年 3月 医学博士（大阪大学）
昭和60年 4月 } 横浜市立大学医学部助手
昭和62年12月 }
昭和63年 1月 } 名古屋大学農学部助手
平成 8年10月 }
昭和63年 } 米国ロックフェラー大学にて共同研究（約1年間）
平成 3年 }
平成 8年11月 北海道大学大学院地球環境科学研究科助教授
平成17年 4月 北海道大学大学院地球環境科学研究院助教授
平成19年 4月 北海道大学大学院地球環境科学研究院准教授

農学研究院准教授

たに ひろし
谷 宏 氏



学生時代を含めれば30年以上を北海道大学にお世話になりました。数々の先生方からご援助をいただき、また、多くの学生諸君と共に好きな研究ができて感無量です。私は学部生時代の卒業論文を始めようとした時、デジタルという言葉が農業には似つかわしくない当時に、農業気象データのデジタル化というテーマを与えられました。趣味でマイコンを触っていたこともあり興味深く進めることができ、それ以来、リモートセンシングの農業への利活用を目指した研究を通じてデジタルデータを扱ってきたことになります。この技術を通じて環境に関わる課題解決へも取り組むことができ、広い視野を持った上での研究活動の重要性を感じたと同時に、国内外でのフィールド調査において、多数の現地の方々からの協力をいただき、そのありがたさを痛感しました。上空から眺める「眼」によって農作物の生育を天候に左右されずに精度良く予測する技術は、今後も飛躍的に進歩することと思いますが、その一部の仕事に携われたことは幸せに感じます。これまでの人生の大半を過ごした北海道大学とそこで出会った教員、職員、そして学生の皆さんに深く感謝申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年 5月24日
昭和54年 3月 北海道大学農学部農業工学科卒業
昭和56年 3月 北海道大学大学院環境科学研究科修士課程修了
昭和56年 4月 北海道大学農学部助手
平成 4年 8月 山口大学農学部助教授
平成11年10月 北海道大学大学院農学研究科助教授
平成18年 4月 北海道大学大学院農学研究科助教授
平成19年 4月 北海道大学大学院農学研究科准教授

教育学研究院准教授

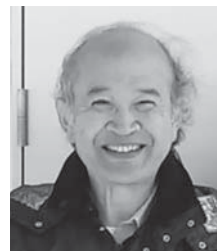
ほのべ こういち
保延 光一 氏



北大に着任して早29年が経ちましたが、この間大学設置基準大綱化による教養部の廃止、それに伴う体育の講座化、大学院重点化、大学の法人化と改革続きの中で様々な議論を重ねてまいりました。まさに大きな大学改革の渦中に教員をやって来たわけですが、私の感想として北大はこの過程で教育機関から研究機関へと性格を大きく変えたと感じています。私が着任した当時は教養部の一般体育の担当者としての役割がほとんどで、日々教養教育に追われておりました。教養部の行事や委員会の任務も数多くありました。その仕事を通して特に数多の学生たちに接して来た経験から世の中には多様な人間たちがいるということを知りました。出自や家庭環境、生活環境、身体的事情、精神的事情、宗教など、人間が育っていく土壌は大学は一つしか提供出来ないかもしれないが、彼らはそこから各々様々なものを吸収し、成長し、それぞれの人生に向けて巣立っていったことでしょう。そこに私がどれだけお手伝い出来たのかわかりません。勉強させてもらったことの方が多いようにも感じます。しかし、いつも世の中の様々な方面で活躍出来るような人材となって欲しいという願いを込めて学生には接し続けて来ました。そして、初期の頃の学生は既に世の中のリーダー的な立場に立つ年齢となっています。これからの未来を創造していく人間たちに私の託した願いが少しでも生きているなら、私が北大で過ごした歳月も無駄ではなかったと思うこの頃です。すっかり研究機関となった北大も人が育っていく土壌をこれからも耕し続けて、人材の実り多き大学であり続けて欲しいと願っています。

工学研究院准教授

むらお なおと
村尾 直人 氏



昭和60年11月に助手として着任し、34年間を大気保全工学研究室で過ごしてまいりました。この間、大気汚染は都市規模（光化学スモッグ）から大陸規模（酸性雨、PM2.5）、そして地球規模（地球温暖化や成層圏オゾン層の破壊）へとそのスケールを増してきましたが、研究対象を得て、室内実験や国内外のフィールド観測、モデル計算など、さまざまな手段を用いてこの分野で研究・教育活動できたことは幸いでした。また、先輩、同僚の先生方に恵まれ、研究、教育に取り組むことができ、感謝しています。国内の大気汚染は大きく改善されてきましたが、地球温暖化はこれからの人の社会において、最も大きな問題の一つになってゆくものと思われます。本学からも今後大きな貢献がなされることを願ってやみません。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年 2 月13日
昭和55年 3 月 筑波大学第一学群自然科学類物理学専攻卒業
昭和59年 3 月 筑波大学大学院修士課程体育研究科修了
昭和56年 4 月 } 民間（マルマンゴルフ株式会社）
平成 3 年 1 月 }
平成 3 年 1 月 北海道大学教育学部講師
平成 8 年 8 月 北海道大学教育学部助教授
平成12年 4 月 北海道大学大学院教育学研究科助教授
平成19年 4 月 北海道大学大学院教育学研究院准教授

歯学研究院准教授

いいづか 飯塚
ただし 正 氏



昭和49年春、晴れて北大歯学部に入學して以来、札幌にて迎える47回目の春に北海道大学を定年退職することになりました。

振り返りますと、北大歯学部卒業後大学院に進学し、大学院修了後は口腔病理学教室にて助手に採用になり職員としてのスタートとなりました。口腔病理学教室では病理学、口腔病理学の研鑽とともに、多くの大学院生や臨床の先生方と出会い、様々な仕事を一緒にすることができました。

平成18年8月からは学部教育、大学院教育のより一層の充実を目的に、新たに設置された学術支援部に助教授として着任しました。学術支援部においては、専門性の高い技術職員とともに、基本的な研究手技の教育や指導および大型研究機器や情報ネットワークシステムの維持、管理等多岐にわたる教育、研究支援業務に携わり現在に至っております。

このように人生の大半を北海道大学において過ごして来た訳ですが、周りの人々や環境にとっても恵まれ、自分にとっては、とても充実したかけがえのない時間を過ごすことができました。これもひとえに多くの先生方や職員の方々のご支援の賜物と深く感謝しております。

最後に、お世話になった皆様方に改めて心から感謝申し上げるとともに、北海道大学の益々の発展を祈念いたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年 3 月13日
昭和55年 3 月 北海道大学歯学部卒業
昭和59年 3 月 北海道大学大学院歯学研究科博士課程歯学臨床系修了
昭和59年 3 月 博士（歯学）（北海道大学）
昭和59年 4 月 北海道大学歯学部助手
平成12年 4 月 北海道大学大学院歯学研究科助手
平成18年 8 月 北海道大学大学院歯学研究科助教授
平成19年 4 月 北海道大学大学院歯学研究科准教授
平成29年 4 月 北海道大学大学院歯学研究院准教授

北海道大学病院准教授

（診療教授）

みこや 三古谷
ただし 忠 氏



三浦綾子女史の小説で北海道に憧れ、北大に入學して44年が経過しました。卒後一貫して北大病院で口腔外科を生業に過ごしてきました。昭和から平成に移る頃、主任教授から頂戴したのが口唇口蓋裂という課題です。以来その道を歩むことになりました。

日本人の口唇口蓋裂の発生頻度は600人に1人と大変高く、世の大多数の関心は希薄だが、当事者・家族にとっては青天の霹靂であり心身の苦痛ははかりしれません。顔貌や言語、顎顔面発育の問題に直面します。外科治療は必須ですが、手術の傷は顎成長を障害するという難題が立ち回っています。“言語と顎発育の両立をはかる治療”は如何にすべきか、北海道という広域であまねく最良の医療を提供するには如何にすべきか、模索が始まりました。偶然か必然か、その時々に進む道を示してくれる恩人と呼べる方々と出会い、力強く支援してくれる同僚や後輩たちにも恵まれ、診療体制づくりに邁進することができました。何と果報者であったことか。しかし、一人の口唇口蓋裂患者の治療結果が判明するにはあまりに長い期間を要します。私はこの度、途中退場をします。熱意ある後進に後を委ね、診療・研究が地道（愚直？）に継続されていくことを願っております。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年12月21日
昭和56年 3 月 北海道大学歯学部歯学科卒業
昭和60年 3 月 北海道大学大学院歯学研究科博士課程修了
昭和60年 3 月 歯学博士（北海道大学）
昭和60年 4 月 北海道大学歯学部助手
平成 7 年10月 北海道大学歯学部附属病院講師
平成11年 7 月 北海道大学歯学部講師
平成12年 4 月 北海道大学歯学部附属病院講師
平成16年 1 月 北海道大学医学部・歯学部附属病院助教授
平成19年 4 月 北海道大学病院准教授
平成20年11月 北海道大学病院准教授・診療教授
平成29年 4 月 北海道大学病院高次口腔医療センター部長

遺伝子病制御研究所准教授

たきもと まさと
瀧本 将人 氏



私は、昭和56年に本学の大学院医学研究科（医学部旧癌研究施設病理部門、主任小林博教授）に入学しました。在学中に、獣医学部の故内貴正治助教授と共同研究を行い、癌抗原の一つを生化学的に同定し、その本態を分子レベルで明らかにしました。大学院修了後は、当時北海道では専門家が少なかった遺伝子組換え技術に基づいた分子生物学を、道外の大学や米国において学び研究を行いました。

平成7年に医学部旧癌研究施設（分子遺伝部門、主任葛巻暹教授）の講師として赴任致しました。研究では、癌と精巣に高発現する新規ヒト遺伝子をクローニングし、この遺伝子の発現を制御することでがん細胞の増殖を抑制できることを、試験管レベルのみならず、動物実験において示すことができました。この遺伝子に関し、昨年名古屋で開催された国際学会において招待講演を依頼され、発表する機会を得ました。長い研究生活の上で良い思い出となりました。

在職中に慢性の病気を発症し、北大病院に二度、合わせて5か月間入院しました。退院後も症状が残り、現在でも北大病院の先生、皆様にお世話になっております。これまで研究を続けることができ、定年を迎えることができましたことは、遺伝子病制御研究所、医学部、大学病院の先生、皆様方のご支援の賜物であり、ここに厚く御礼申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年7月17日
昭和56年3月 弘前大学医学部卒業
昭和60年3月 北海道大学大学院医学研究科博士課程修了
昭和60年3月 医学博士（北海道大学）
昭和60年5月 京都大学ウイルス研究所助手
昭和61年10月 米国国立癌研究所Fellow
平成2年10月 大阪大学細胞工学センター助手
平成7年4月 北海道大学医学部癌研究施設講師
平成14年2月 北海道大学遺伝子病制御研究所准教授

理学・生命科学事務部長

かわかみ ゆたか
川上 豊 氏



昭和53年5月に苫小牧工業高等専門学校に採用され、10年間勤務した後、本学に転任となり、その後、2度目の苫小牧工業高等専門学校、北見工業大学の勤務を経て、この度定年を迎えることとなりました。

北海道大学の27年間では、函館キャンパスでの勤務も経験させていただき、おしよろ丸V世の建造や、建物の改修などとても思い出に残る仕事ことができました。特に、おしよろ丸V世の建造では、岡山県玉野市での起工式、進水式、函館での竣工式と他の部局では、経験することができないような仕事をさせていただきました。これもひとえに先輩、同僚、後輩、並びに先生方の温かいご指導とご支援の賜と深く感謝し、心から厚くお礼申し上げます。

最後になりますが、北海道大学が今後益々発展されることを祈念いたしますとともに、皆様方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

長い間お世話になり本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和34年6月12日
昭和53年3月 北海道岩見沢東高等学校卒業
昭和53年5月 苫小牧工業高等専門学校庶務課
昭和58年4月 苫小牧工業高等専門学校会計課
昭和59年4月 苫小牧工業高等専門学校庶務課
昭和63年4月 北海道大学工学部経理課
平成2年11月 北海道大学経理部経理課
平成5年4月 北海道大学経理部経理課収入掛収入管理主任
平成8年4月 北海道大学農学部経理掛予算運用主任
平成11年4月 北海道大学経理部第一契約課付主任
平成12年4月 苫小牧工業高等専門学校会計課用度係長
平成15年4月 北海道大学触媒化学研究センター総務掛長
平成16年4月 北海道大学北キャンパス合同事務部経理掛長
平成18年4月 北海道大学財務部経理課経理係長
平成19年4月 北見工業大学財務課副課長
平成21年4月 北海道大学学術国際部産学連携・研究推進課課長補佐
平成22年7月 北海道大学財務部経理課課長補佐
平成24年4月 北海道大学函館キャンパス事務部事務長
平成27年4月 北海道大学研究推進部研究支援課長
平成29年4月 北海道大学研究推進部研究振興企画課長
平成30年4月 北海道大学理学・生命科学事務部長

医学系事務部長

てらさわ むつみ
寺澤 睦 氏

他人事のように思っていた節目の日が、いよいよ自分に順番が廻ってきました。昭和53年4月に函館工業高等専門学校で社会人として一步を踏み出し、昭和55年11月に北海道大学へ転任になり、その後の旭川医科大学での3年間を含め42年間の勤務を経て、この度定年を迎えることとなりました。

北海道大学での約37年間、年々、社会情勢が厳しくなり、本学を取り巻く環境が大きく変化する中、その職務を果たすことができたのは出会った多くの方々の支えによるもので、お力添えがなければここまで来ることはできませんでした。

振り返れば限りなく思い出がわいてまいります、多くの方々との出会いと思い出は私の宝物であり今の私を作っております。

これまで出会ったすべての皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和34年6月20日
昭和53年4月 函館工業高等専門学校
昭和55年11月 北海道大学
平成12年4月 旭川医科大学会計課出納係長
平成14年4月 旭川医科大学会計課総務係長
平成15年4月 北海道大学経理部主計課専門職員
平成17年4月 北海道大学財務部主計課財務企画係長
平成18年10月 北海道大学学術国際部研究協力課課長補佐
平成20年4月 北海道大学財務部主計課課長補佐
平成22年4月 北海道大学施設部施設管理課長
平成23年4月 北海道大学財務部資産運用管理課長
平成24年4月 北海道大学総務企画部広報課長
平成26年4月 北海道大学財務部調達課長
平成28年4月 北海道大学理学・生命科学事務部長（兼）事務課長
平成30年4月 北海道大学医学系事務部長

学務部学務企画課長

おかばやし せいじ
岡林 精二 氏

小樽商科大学から本学に転任となり、その後、日高少年自然の家と旭川医科大学で勤めさせていただき、今月をもって定年退職を迎えました。主な業務は教務ですが、庶務や広報など、とても恵まれた環境の中で、多岐に亘る経験させていただきましたことに、お礼申し上げます。

北大では、その3分の2の期間を教養棟、現在の高等教育推進機構で勤務させていただきました。毎日通う構内は、時折、リスの姿も見られ、四季をとおして自然に溢れた都会の中のアオアシスのようなキャンパスでは、大学祭の前の季節になると、北18条門から延びるメインストリートの両脇に並ぶ樹木から新緑が伸び、日に日に緑のアーチが完成していく様子は、とても心に残る景観でした。今年の夏には、このアーチの下を世界中が注目するランナーたちが駆け抜けますが、北海道大学を世界に売り込む良い機会になってもらえればと思います。

最後に、北大が4つの基本理念を生かして、益々発展されますよう、お祈り申し上げます。長い間お世話になりました。

略 歴

昭和55年5月 小樽商科大学
昭和63年4月 北海道大学
平成12年7月 国立日高少年自然の家庶務課庶務係長
平成15年4月 北海道大学総務部総務課広報掛長
平成16年4月 北海道大学総務部総務課広報室広報・渉外掛長
平成17年4月 北海道大学学務部入試課入試第一係長
平成19年4月 旭川医科大学教務部学生支援課課長補佐
平成21年4月 北海道大学学務部入試課課長補佐
平成22年4月 北海道大学学務部教務課課長補佐
平成24年4月 北海道大学学務部教務課全学教育・総合教育推進室長
平成26年4月 北海道大学学務部入試課長
平成27年4月 北海道大学工学系事務部教務課長
平成29年4月 北海道大学学務部教育推進課長
平成30年4月 北海道大学学務部学務企画課長

研究推進部研究振興企画課長

ろっけ ひでき
六家 英紀 氏



昭和63年11月に北海道大学に採用後、馬齢を重ね定年の歳になりました。

無事定年を迎えることができるのは、上司・同僚に恵まれご指導・ご支援をいただいた賜物と深く感謝しております。

採用当時はハラスメントなどという言葉は耳にすることもなく、職場の人間関係も密で、良くも悪くも先輩の影響力が大きな時代で、現在とは隔世の感があります。

札幌キャンパス以外の勤務では、天塩地方演習林で過ごした3年間は「公」より「私」の面で衝撃がありました。人間より牛の方が多い「へき地」での生活は、初めての経験の連続だったことを懐かしく思い出します。

最後に、北海道大学を取り巻く環境は厳しい状況が続いておりますが、北海道大学の益々の発展と、お世話になった皆様のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和34年 8 月 7 日
昭和63年11月	北海道大学
平成12年 4 月	北見工業大会計課用度係長
平成15年 4 月	北海道大学経理部第二契約課第四契約掛長
平成16年 4 月	北海道大学財務部経理課財務管理室専門職員
平成18年 4 月	北海道大学病院経営企画課予算管理係長
平成19年 4 月	北海道大学病院経営企画課係長
平成20年 4 月	北海道大学工学研究科・情報科学研究科・工学部経理課課長補佐
平成21年 4 月	北海道大学工学系事務部経理課課長補佐
平成22年 4 月	北海道大学財務部調達課課長補佐
平成24年 4 月	独立行政法人国立高等専門学校機構苫小牧工業高等専門学校総務課長
平成26年 4 月	北海道大学北キャンパス合同事務部事務長
平成28年 4 月	北海道大学財務部経理課長
平成30年 4 月	北海道大学研究推進部研究振興企画課長

施設部施設整備課長

いいじま こうじ
飯島 浩司 氏



40年前、北大の採用試験を受け施設部に配属されました。「設計の仕事」と聞いていたのに事務室の中は灰色の作業着を着た目つきの怖いおじさんばかりで、黒いゴム長と白ヘルメット姿で建設現場に向かう先輩たちを「これが設計の仕事か?」と不思議な気持ちで眺めていました。

あの頃の北大構内には戦前に建てられた恵迪寮など木造の建物残り、早朝には馬術部の馬が部員に牽かれながら中央道路を散歩するのどかなキャンパスで、札幌の街も高層の建物が少なく、事務局3階にあった事務室の窓から豊平川で揚がる花火を見ていたことを思い出します。

当時は学生運動の気風がまだ残っており、学生団体と事務職員との睨みあいやもみ合いがありましたが、ヘルメットを自前で持っている施設部の職員はいつも一番前に押し出されていたものです。

40年が過ぎて、自分も立派に「目つきの怖いおじさん」となり、定年を迎えることができました。

これまでの大学職員生活で出会った皆さんに心から感謝します。「どうもありがとうございました。」

略 歴

生 年 月 日	昭和35年 1 月 2 日
昭和55年 7 月	北海道大学施設部建築課
平成10年 4 月	旭川医科大学業務部施設課工営係長
平成13年 4 月	北海道大学施設部建築課第三建築掛長
平成15年 4 月	北海道大学施設部建築課第二建築掛長
平成16年 4 月	北海道大学施設部施設整備課建築整備第一掛長
平成16年 7 月	北海道大学施設部施設整備課整備計画係長
平成19年 4 月	北海道大学施設部施設整備課係長
平成20年 4 月	北海道教育大学事務局財務部施設課総括主査
平成20年 7 月	室蘭工業大学施設課長
平成22年 7 月	室蘭工業大学施設グループマネージャー
平成23年 4 月	帯広畜産大学企画総務部施設課長
平成24年 4 月	帯広畜産大学経営企画支援部施設課長
平成24年 7 月	帯広畜産大学経営管理部施設課長
平成27年 4 月	北海道教育大学事務局財務部施設課長
平成30年 4 月	北海道大学施設部施設整備課長

函館キャンパス事務部事務長

こしお しゅんじ
小塩 俊二 氏

昭和57年4月経済学部を振り出しに、38年間一度も北海道大学から籍を離れることなく勤務させていただき、この3月末をもって定年を迎えることとなりました。

この間、診療報酬の改定に伴い病院看護部の皆さんと各地に出向いて看護師の増員確保に奔走したり、寮の問題で評議員を守るため事務局前で学生の皆さんと対峙したりと色々な思い出が思い返されます。

色々な事はありませんでしたが、無事定年を迎えられたことは多くの皆様に支えていただいたおかげであり、心より感謝申し上げます。

長い間本当にお世話になりました。

略 歴

生 年 月 日	昭和34年8月3日
昭和57年4月	北海道大学
平成11年4月	北海道大学水産学部庶務掛長
平成14年4月	北海道大学大学院地球環境科学研究科総務掛長
平成17年10月	北海道大学病院総務課人事係長
平成20年4月	北海道大学北キャンパス合同事務部事務長補佐
平成22年4月	北海道大学学術国際部研究協力課課長補佐
平成23年4月	北海道大学学務部教務課課長補佐
平成25年4月	北海道大学情報環境推進本部情報推進課長
平成28年4月	北海道大学学務部キャリアセンター課長
平成29年4月	北海道大学学務部キャリア支援課長
平成30年4月	北海道大学函館キャンパス事務部事務長

薬学事務部事務長

さん ぼん ぎ たけし
三本木 毅 氏

昭和58年に国立大雪青年の家に採用の後、本学に転任となり3年間の室蘭工業大学の勤務を経て、このたび定年退職を迎えることとなりました。

本学では、様々な仕事を経験させていただいたなかで多くの皆さまとの出会いがあり、有意義な毎日を経過することができましたことは、良き先輩、同僚、後輩、並びに先生方の温かいご指導とご支援があつてのことと心からお礼申し上げます。

最後になりますが、北海道大学が益々発展し続けることと皆さま方のご健勝とご活躍を心から祈念しております。長い間お世話になりました。ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和34年5月23日
昭和57年3月	酪農学園大学酪農学部卒業
昭和58年1月	国立大雪青年の家
昭和61年4月	北海道大学
平成12年4月	室蘭工業大学総務課企画調査係長
平成15年4月	北海道大学学務部入試課専門職員(AO入試担当)
平成16年4月	北海道大学学務部入試課入試第三係長
平成17年4月	北海道大学総務部広報課広報・渉外係長
平成19年4月	北海道大学総務部広報課係長(広報・渉外担当)
平成20年4月	北海道大学総務部広報課課長補佐
平成23年4月	北海道大学理学・生命科学事務部事務課課長補佐
平成24年4月	北海道大学医学系事務部保健科学研究所事務課長
平成27年4月	北海道大学教育学部事務部事務長
平成30年4月	北海道大学薬学事務部事務長

農学・食資源学事務部事務長

みなが ひろひで
見永 博英 氏



昭和63年に北海道大学教養部に採用となり31年間、様々な仕事に携わり多くの方々と出会うことができ、充実した日々を過ごすことが出来ました。これもひとえに先輩、同僚、後輩並びに先生方、皆さまの温かいご指導、ご支援があったことと厚くお礼申し上げます。最後になりましたが、国立大学法人は今後も大学改革の着実な実施や、評価に基づく資源配分の加速など、厳しい状況が続くと思いますが、北海道大学の益々の発展と皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。長い間お世話になり本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和34年 9 月23日
昭和63年 4 月	北海道大学教養部
平成 4 年 4 月	北海道大学厚生課
平成 6 年 4 月	北海道大学学生課庶務掛大滝セミナーハウス事務主任
平成 8 年 4 月	北海道大学工学部教務課教務掛第一教務掛教育課程主任
平成10年 4 月	北海道大学工学部教務課教務掛学部教育課程主任
平成11年 4 月	北海道大学医学部教務係主任
平成12年 4 月	北海道大学水産課学術研究科・水産学部教務掛長
平成15年 4 月	北海道大学学務部入試課第二入試掛長
平成17年 1 月	北海道大学学務部教務課全学教育事務室全学教育第一係長
平成19年 4 月	北海道大学学務部教務課全学教育事務室係長
平成20年 1 月	北海道大学学務部教務課係長
平成21年 4 月	北海道大学総務部総務課秘書室室長補佐
平成23年 4 月	北海道大学工学系事務部教務課長
平成25年 4 月	小樽商科大学総務課長
平成28年 4 月	北海道大学農学事務部事務長
平成29年 4 月	北海道大学農学・食資源学事務部事務長

工学系事務部教務課長

おがわ さとる
小川 悟 氏



高校では理数科に入ったのに、大学は商学部、会計学を勉強したはずが、永く勤めたのは北海道大学。「こだわちなさすぎ!」の感が否めません。それでも、その時その時の私の選択。「人生やり直しがきく」をモットーにやってきました。大学卒業の頃は、就職氷河期、クラスには6人の北海道出身者がおり、そのほとんどが北海道で働きたいと言っていました。残念ながら田舎で職を得たのは私一人。2年間ほど地元で親孝行をさせていただきました。安穩なレールに乗っていることが許せず、「東京で一花!」と今にして思えば、若気の至り。先輩には「東京に行く」と、戻りたくても戻れなくなるよ」と助言されましたが、「嫌になったら帰ってくるさ」と……。里心がついて、田舎にUターンしようとしたのですが、厳しいものがありました。運良く、北海道大学に拾っていただきました。教務掛、点検評価、留学生、入試、旭川医大、総務課、企画課、教育大、最後が工学部教務課、最初と最後が教務・学生担当だったことがとても幸せでした。色とりどりの学生、素敵な先生、素晴らしい先輩、頼もしい後輩の中で30年間、大学に関わる仕事ができただけに感謝いたします。ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和34年12月 5 日
昭和58年 3 月	明治大学商学部卒業
昭和58年 4 月	十勝支庁地方部会計課
昭和60年 6 月	東京国税局蒲田税務署法人調査部門
平成元年 4 月	北海道大学
平成13年 4 月	旭川医科大学総務部庶務課係長
平成16年 4 月	北海道大学総務部総務課係長
平成19年 1 月	北海道大学企画部企画調整課係長
平成20年 4 月	北海道大学企画部調査分析課係長
平成21年 4 月	北海道大学学務部入試課係長
平成22年 4 月	北海道大学学務部入試課課長補佐
平成25年 4 月	北海道教育大学学務部入試課長
平成29年 4 月	北海道大学工学系事務部教務課長

医学系事務部保健科学研究院 事務課長

まつしま としゆき
松嶋 敏幸 氏



苫小牧工業高等専門学校に採用され、本年の3月で定年退職を迎えることになりました。

無事に迎えることができましたことは、多くの上司、先輩、同僚、後輩の皆様、さらに関係いたしました先生方の暖かいご指導ご支援のお陰であると心より感謝申し上げます。

北海道大学に32年間、苫小牧工業高等専門学校、釧路工業高等専門学校、室蘭工業大学での10年間を含め、42年間の長きに亘り多くの方々に支えられ楽しく過ごさせていただきありがとうございました。

最後になりますが、北海道大学が今後、益々発展されることを祈念しますとともに、皆様方のご健勝とご活躍をウポポイ（民族共生象徴空間）が4月24日に誕生する白老町からお祈り申し上げます。長い間お世話になり、本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和35年1月18日
昭和53年3月	苫小牧工業高等専門学校
昭和55年4月	北海道大学
平成12年4月	釧路工業高等専門学校会計課出納係長
平成15年4月	北海道大学医学部附属病院管理課企画掛長
平成15年10月	北海道大学医学部・歯学部附属病院管理課施設企画掛長
平成16年4月	北海道大学病院管理課施設企画掛長
平成18年4月	北海道大学農学事務部専門職員
平成19年4月	北海道大学農学事務部係長
平成21年4月	北海道大学薬学事務部係長
平成23年7月	室蘭工業大学財務グループコーディネーター
平成25年7月	北海道大学獣医学研究科・獣医学部事務長補佐
平成29年4月	北海道大学医学系事務部保健科学研究院事務課長

文学事務部事務長

たにぐち みつぐ
谷口 貢 氏



昭和53年に室蘭工業大学に採用後、平成11年に北海道大学に転任し、その後、北見工業大学、帯広畜産大学での勤務を経験させていただきました。

定年退職という実感がない中、改めて昔を思い起こすと、採用当時、職場の先輩方に誘われて居酒屋デビュー。その後、朝野球や卓球など色々なスポーツで楽しく汗をかき、また、仕事では、給与法や人事院規則を上司から教わり、乙74号や576号通知などを駆使して給与決定ができたときのマニアックな達成感が懐かしく思い出されます。

これまで何とか勤務し仕事のできたのも、理解のある上司、相談に乗ってくれた同僚、頼りになる後輩がいてくれたからであり、この場を借りて心より感謝申し上げます。

法人化後の大学を取り巻く環境が大きく変化しておりますが、北海道大学が今後益々発展されることを祈念するとともに、これまでお世話になった方々のご健康とご活躍をお祈り申し上げ、挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和34年5月3日
昭和53年5月	室蘭工業大学
平成11年4月	北海道大学
平成12年9月	北見工業大学総務課人事係長
平成15年4月	北海道大学総務部国際交流課専門職員
平成15年10月	北海道大学研究協力部国際企画課専門職員
平成16年4月	北海道大学学術国際部国際企画課国際交流掛長
平成17年10月	北海道大学北キャンパス合同事務部庶務係長
平成19年4月	帯広畜産大学企画総務部総務課課長補佐
平成21年4月	北海道大学病院総務課課長補佐
平成24年4月	北海道大学教育学事務部事務長
平成27年4月	北海道大学経済学研究科・経済学部事務長
平成29年4月	北海道大学文学研究科・文学部事務長
平成31年4月	北海道大学文学事務部事務長

北海道大学病院総務課長

あべ やすなり
阿部 康成 氏



ここに無事定年を迎えることが出来たことは、ひとえに皆様方のご支援の賜であり、今までの勤務を振り返ると、感慨深いものがございます。

大学卒業後国鉄に入社し、その後、何とか東京大学に転職が叶い、右も左もわからない中、夢中で大学職員に慣れようとした4年間、東大では全く縁の無かった医療技術職員、看護師、医系教員などの人事を担当し、悪戦苦闘の北大病院での5年間、庶務係として少し慣れてきた北大歯学部での3年間、冬の寒さが身に染みたけれども、週末の道東観光を楽しみに仕事をした北見工業大学での3年間、ただただ忙しく、責任も重くなった北大総務企画部での11年間、通勤には難儀したけれども優秀な人材に恵まれた北海道教育大学での3年間、過去の立場より責任が重く対応が非常に厳しかった北大病院での3年間で最後に定年退職となります。

いずれの勤務箇所においても、諸先輩や同僚、後輩に恵まれ、大過なく勤務を果たすことができましたことは、公私にわたる皆様の心からのご厚情によるものであり、厚くお礼申し上げます。

これからも感謝の気持ちを忘れずに、第二の人生を歩む所存です。

最後に皆様のご多幸をお祈りして、退職の言葉とさせていただきます。

皆様、大変お世話になりました。

略 歴

生 年 月 日 昭和34年12月10日
昭和63年4月 東京大学
平成4年4月 北海道大学
平成12年4月 北見工業大学総務課職員係長
平成15年4月 北海道大学総務部人事課職員掛長
平成16年4月 北海道大学総務部職員課職員掛長
平成19年4月 北海道大学総務部総務課係長
平成20年8月 北海道大学総務部職員課課長補佐
平成23年4月 北海道大学総務企画部人事課労務管理室長
平成24年4月 北海道大学総務企画部人事課厚生労務室長
平成26年4月 北海道教育大学総務部人事課長
平成29年4月 北海道大学病院総務課長

北海道大学病院医事課長

よしだ なおみ
吉田 直美 氏



私が採用となりました昭和55年当時は、男女雇用機会均等法の成立以前で、女性は結婚や出産などにより退職せざるを得ない様な時代でした。短大卒業を控え、民間への就職が決まっていたましたが、女性でも長く勤めることができることから国家公務員として小樽商科大学への就職を決め、その後北海道大学に転勤となり、40年間にわたり勤めさせていただきました。

この間に勤務いたしました各職場では、苦しく辛い事も多々ありましたが、色々な方々との出会いがあり、楽しく過ごすことが出来ました。

こうして無事に定年退職を迎えることが出来ますことは、ひとえに理解のある上司や先輩の方々、心を割って話し合える同僚の皆様、頼りがいのある後輩達に恵まれ、さらに各学部等の先生方や病院の様々な職種の皆様方の温かいご指導とご支援のおかげであり、心より深く感謝しお礼を申し上げる次第でございます。

最後になりますが、北海道大学の益々の発展と、お世話になりました皆様のご健勝とご活躍を心からお祈りいたします。

長い間お世話になり、本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和35年3月22日
昭和55年3月 藤女子短期大学国文科卒業
昭和55年3月 小樽商科大学
昭和59年9月 北海道大学
平成17年4月 北海道大学病院医療企画課専門職員
平成17年10月 北海道大学病院医事課入院係長
平成18年4月 北海道大学病院医事課包括審査係長
平成20年4月 北海道大学医学系事務部総務課係長
平成23年4月 北海道大学病院医事課課長補佐
平成27年4月 北海道大学財務部経理課課長補佐
平成28年4月 北海道大学医学系事務部会計課長
平成30年4月 北海道大学病院医事課長

水産学部附属練習船おしよ丸／
機関長ふじもと ふみお
藤本 文雄 氏

私が、おしよ丸Ⅲ世の三等機関士として函館で暮らし始めたのは、昭和58年春でした。その頃は、華やかだった北洋漁業のなごりがまだ残っていたり、今は懐かしい青函連絡船や日本海周りの寝台特急を岡山への帰省に利用していました。

同年の12月から完成したばかりのⅣ世、現うしお丸、現在のおしよ丸Ⅴ世と乗船し、船内及び国内外問わず各寄港地での、辛かったことより、多くの楽しかった記憶が思い出されます。

現在の生活は、昔とは比較にならないほどの自動化や膨大な情報量で便利に成りました。しかしながら、良き世の中に成ったとは思えません。自分なりに大過無く職務を全うでき、あっという間の37年でした。これも偏にお世話になった職場に感謝！感謝！です。

これからも大学のさらなる発展と、皆さんのご活躍、ご健康を願っています。長い間、ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和34年 6 月21日
昭和58年 3 月 水産大学校機関学科専攻科卒業
昭和58年 5 月 北海道大学水産学部附属練習船おしよ丸三等機関士
平成24年 4 月 北海道大学水産学部附属練習船うしお丸機関長
平成30年 3 月 北海道大学水産学部附属練習船おしよ丸機関長

産学・地域協働推進機構
学術主任専門職おの でら こういち
小野寺 晃一 氏

民間企業を経て、平成21年 7 月に北海道大学に赴任して以来、平成25年から現職に採用していただき、10年 9 ヶ月間北海道大学にお世話になり定年の日を迎えることになりました。

大学の研究成果である知財を技術移転して産業を創出するという業務において、大学の基礎研究のシーズが民間企業との共同研究を経て10年の歳月をかけて道内大手企業で専用の量産製造工場着工に至った事や、大学の知財から起業した大学発ベンチャーが8年の歳月をかけて独創的な戦略商品の量産製造販売を実現した事が定年の年に重なったのは記憶に残る思い出になりました。

これまで、産学連携の業務を通じて数百名以上の大学研究者や産学・地域協働推進機構の関係者、部局事務の関係者、様々な民間企業の関係者、国や地方の産学連携関係者、特許事務所の関係者の方々と知り合う機会を得て、技術移転の様々な事案で交流させて頂きました。改めて感謝を申し上げます。

定年になりますが、今しばらく大学でお世話になりますので、よろしくお願い致します。

略 歴

生 年 月 日 昭和34年 8 月22日
昭和58年 3 月 東京理科大学工学部卒業
平成14年 9 月 東北大学大学院工学研究科博士後期課程修了
平成14年 9 月 博士（工学）（東北大学）
昭和58年 4 月 } 民間企業
平成21年 4 月 }
平成21年 7 月 北海道大学産学連携本部特定専門職員
平成25年 4 月 北海道大学産学連携本部学術主任専門職
平成27年 4 月 北海道大学産学・地域協働推進機構学術主任専門職

■ 諸会議の開催状況

役員会（令和2年2月3日）

議 案・クロスアポイントメントの適用について

協議事項・全学運用教員の措置について

- ・本学教員が従事する営利企業への役員兼業の見直しについて
- ・「大学院教育改革ステーション（仮称）」の設置及び高等教育推進機構の改組について
- ・諸規則の一部改正について
- ・就業規則関連規程の一部改正について

報告事項・令和元年度運営費交付金の追加配分について

- ・令和2年度客観・共通指標等による評価の結果及び運営費交付金等（予定額）について
-

教育研究評議会（令和2年2月12日）

議 題・「大学院教育改革ステーション（仮称）」の設置及び高等教育推進機構の改組について

- ・諸規則の一部改正について

報告事項・全学運用教員の措置について

- ・令和元年度運営費交付金の追加配分について
 - ・令和2年度客観・共通指標等による評価の結果及び運営費交付金等（予定額）について
-

役員会（令和2年2月19日）

議 案・「大学院教育改革ステーション（仮称）」の設置及び高等教育推進機構の改組について

- ・諸規則の一部改正について
- ・令和元年度内部統制システムモニタリング結果について
- ・共同プロジェクト拠点に係る認定について
- ・クロスアポイントメントの適用について

報告事項・超過勤務実績について

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しています。

■ 学内規程

国立大学法人北海道大学個人情報管理規程の一部を改正する規程

(令和2年2月10日海大達第5号)

「独立行政法人等の保有する個人情報の適切な管理のための措置に関する指針について」(平成16年9月14日総管情第85号総務省行政管理局長通知)及び「特定個人情報の適正な取扱いに関するガイドライン(行政機関等・地方公共団体等編)」(平成26年特定個人情報保護委員会告示第6号)の一部改正に伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学における独立行政法人等非識別加工情報の提供等に関する規程の一部を改正する規程

(令和2年2月10日海大達第6号)

国立大学法人北海道大学個人情報管理規程(平成17年海大達第65号)の一部改正に伴い、所要の改正を行ったものです。

北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程

(令和2年3月1日海大達第7号)

令和2年2月29日付けで、大学院工学研究院に置く寄附分野の存続期間が満了することに伴い、所要の改正を行ったものです。

北海道大学国際連携研究教育局規程の一部を改正する規程

(令和2年3月1日海大達第8号)

令和2年3月1日付けで、国際連携研究教育局に新たなグローバルステーションを設置することに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学高等教育推進機構規程の一部を改正する規程

(令和2年3月1日海大達第9号)

北海道大学新渡戸カレッジ運営会議規程の一部を改正する規程

(令和2年3月1日海大達第10号)

国立大学法人北海道大学契約職員就業規則の一部を改正する規則

(令和2年3月1日海大達第11号)

令和2年3月1日付けで、高等教育推進機構を改組することに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

北海道大学電子科学研究所規程の一部を改正する規程

(令和2年3月1日海大達第12号)

電子科学研究所連携研究部門に研究分野を新設することに伴い、所要の改正を行ったものです。

北海道大学学生相談総合センター運営委員会規程の一部を改正する規程

(令和2年3月1日海大達第13号)

運営委員会の組織を見直すことに伴い、所要の改正を行ったものです。

■表敬訪問

海外

年月日	来 訪 者	来 訪 目 的
2.2.13	在札幌ロシア連邦総領事館 Sergei A. Marin 総領事	両国の交流に関する懇談



Sergei A. Marin 在札幌ロシア連邦総領事
(左から5人目)

(国際部国際連携課)

■人事

令和2年3月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【教授】		
大学院歯学研究院教授	長谷部 晃	大学院歯学研究院助教
国際連携研究教育局・大学院薬学研究院教授	市 川 聡	大学院薬学研究院教授
国際連携研究教育局・大学院薬学研究院教授	小 川 美香子	大学院薬学研究院教授
国際連携研究教育局・大学院薬学研究院教授	木 原 章 雄	大学院薬学研究院教授
国際連携研究教育局・大学院薬学研究院教授	菅 原 満	大学院薬学研究院教授
国際連携研究教育局・大学院薬学研究院教授	中 川 真 一	大学院薬学研究院教授
国際連携研究教育局・大学院薬学研究院教授	前 仲 勝 実	大学院薬学研究院教授
国際連携研究教育局・大学院薬学研究院教授	松 永 茂 樹	大学院薬学研究院教授
国際連携研究教育局・大学院薬学研究院教授	脇 本 敏 幸	大学院薬学研究院教授
国際連携研究教育局・大学院医学研究院教授	大 場 雄 介	大学院医学研究院教授
国際連携研究教育局・低温科学研究所教授	山 口 良 文	低温科学研究所教授
国際連携研究教育局・遺伝子病制御研究所教授	園 下 将 大	遺伝子病制御研究所教授

新任教授紹介

令和2年3月1日付



歯学研究院教授に

は せ べ あきら
長谷部 晃 氏口腔医学部門口腔病態学分野
口腔分子微生物学教室

生年月日

昭和46年2月2日

最終学歴

北海道大学歯学部歯学科卒業（平成8年3月）
博士（歯学）（北海道大学）

専門分野

微生物学・感染免疫学

訃報

名誉教授 小林 甫 氏
こばやし はじめ
(享年79歳)

小林 甫先生は、病氣療養中のところ2020年1月4日急逝されました。ここに先生の生前の功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

小林先生は、1940年東京に生まれ、横須賀高等学校を経て北海道大学教養部理類に入学、1965年に同大文学部哲学科西洋哲学専修科を卒業後、北海道深川西高等学校に社会科教諭として勤務されました。1973年、北海道大学教育学部助手に採用され（生活教育講座、後の教育社会学研究室）、札幌商科大学人文学部人間科学科を経て、北海道大学教育学部に戻られ、助教授、教授を歴任した後、1996年から北海道大学高等教育機能開発総合センター教

授（生涯学習計画研究部）、2000年から北海道大学大学院文学研究科教授（社会システム科学講座）で教鞭を執られ、2004年3月定年退職後に松山大学特任教授（大学院社会学研究科）を2010年まで務められました。

この間、1989年度にはイタリアのパドヴァ大学政治社会学部、1997年にはポートランド州立大学で在外研究を行い、研究・教育の幅を広げられました。

小林先生の研究領域は教育社会学、地域社会学、労働社会学、社会学説史と多岐にわたり、『教育社会史—日本とイタリアと（大転換期と教育社会構造—地域社会変革の学習社会論的考察）』2010年、東信堂と、『現代的教養<2>技術者生涯学習の生成と展望（大転換期と教育社会構造—地域社会

変革の学習社会論的考察）』2013年、東信堂の著作があります。

小林先生は組織的な研究体制の構築に非凡な能力を発揮され、科学研究費では、基盤研究Bで二度、基盤研究Aで二度、国際学術研究で一度採択され、国内外の研究者仲間や門下生たちを組織して大規模調査や新分野の研究に取り組み、多くの社会学者を育ててきました。

このように、小林先生は社会学のみならず、歴史や思想にまたがる浩瀚な教養により、研究・教育活動の発展に多大な功績を残されました。

小林先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

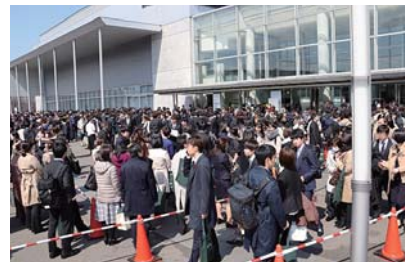
（文学研究院・文学部）

平成から令和の時代に入った2019年度の北大時報投稿記事を、本誌とは違った角度で振り返ります。

平成31年4月号 (No.781)

毎年4月号には多くの記事を投稿いただきます。平成最後の北大時報も、110頁もの大作となりました。

複数の写真で紹介した平成31年度入学式。式終了後も多くの新入生・保護者が晴天の中記念撮影のための列を作り、北海道大学入学を喜ぶ姿が見られました。



令和元年9月号 (No.786)

9月号のトップ記事は、緑の本学を駆け抜けた北海道マラソン2019。本誌では本学札幌キャンパスを駆け抜けた選手の様子が紹介されています。通常は閉門されている「南門」も、マラソンの際には特別に開門されます。



令和元年10月号 (No.787)

10月号はホームカミングデー2019を16頁にわたって紹介しました。クラーク会館講堂の舞台に設置されている緞帳は普段は見る事が出来ませんが、今年も歓迎式典・記念講演会開演前後にお披露目されました。



令和2年1月号 (No.790), 2月号 (No.791)

1月号は大学入試センター試験の実施、2月号は北海道大学一般入試の志願状況と、入試関係の報告から始まりました。

センター試験・個別学力試験の試験場設営日には、職員がすべての試験場教室の準備を行っていました。



リテラポプリ2020春号を発行しました。北海道大学の現在と未来について広く紹介する内容となっています。ぜひご覧ください。

◆<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/litterae.html>



2017.9.4 函館本線 比羅夫～倶知安（倶知安町）

北の鉄道風景 84 山線を往くローカル列車

「山線」の通称を持つ函館本線の長万部～小樽間は非電化区間であって、この区間で運行されるローカル列車には、ディーゼルエンジンを動力源とする気動車が充当されてきた。現在、山線を走行する気動車は、キハ40形、キハ150形及びキハ201形の3形式である。これらのうち、キハ40形とキハ150形気動車は老朽化が進んでいることから、今春のダイヤ改正において、新開発のH100形気動車に置き換えられ

ることとなった。写真は羊蹄山を背景に山線を往くローカル列車であって、キハ40形（左側）とキハ150形（右側）気動車が連結された2両編成である。これまで当たり前のように見られた光景であるが、それもあと僅かで見られなくなってしまうことに一抹の寂しさを感じる。

情報科学研究院 准教授 山本 学

北大時報 ③ No.792 令和2年3月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail: kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。 <https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>